

孟德斯鳩著
何禮之重譯
萬法精理
第八冊
自卷十六
至卷十八

24001

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 番號	第	號
社會科學門 法律法學部		
總記	款	叢書項
目次		
全	18	冊之內第 8 冊
分類 番號	第	320.8 號

校學範師岡福

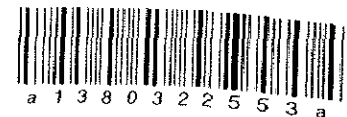
書門	公共圖書
部	
番	
號	52
	冊之內 8

T1A1

23

Ka11ba

圖書 和圖書 遼



福岡教育大学蔵書

孟德斯鳩著
何禮之重譯

萬法精理

明治九年
一月刻成

何氏藏版

萬法精理第八冊目次

卷之十六 家内奴隸制ノ法律ハ全ク土地ノ氣候

ニ關スルヲ論ス

第一回 家中ノ服役ヲ論ス

第二回 南方熱帶ノ諸國ニ於テハ自ラ男女ノ

間ニ不平均アルヲ論ス

第三回 一夫數婦ヲ要ルノ制度ハ大ニ之ヲ扶

持スル所ノ家資ニ關係アル事

第四回 ポリゲミーノ法律ハ人口ノ計表ニ關

係スル事

第五回 マラバルノ法律ノ理由

第六回 ポリゲミーノ本性ヲ論ス

第七回 數妻ヲ娶ル場合ニ於テハ其待遇ヲ同

一ニセサル可カラサルヲ論ス

第八回 男女別居ノヲ論ス

第九回 家政國政ノ關涉ヲ論ス

第十回 東洋ノ道義ノ淵源スル主義

第十一回 全クポリゲミーニ因縁セサル家内ノ

奴隸制ヲ論ス

第十二回 天性ノ嫉妒ヲ論ス

第十三回 嫉妬ヲ論ス

第十四回 東洋ノ家政ヲ論ス

第十五回 離替及ヒ休替ヲ論ス

第十六回 羅馬ノ休替離替ヲ論ス

卷之十七 政事上ノ奴隸制モ亦土地ノ氣候ニ關

涉スルヲ論ス

第一回 政事上ノ奴隸制

第二回 各國ノ人民ニ勇怯ノ差アルヲ論ス

第三回 亞細亞ノ氣候ヲ論ス

第四回 氣候ニ由テ起ル所ノ效果ヲ論ス

第五回 亞細亞北部ノ人民ト歐羅巴北部ノ人

民トハ齊シク其南部ヲ征服セシモノ

ト雖モ其效果ハ甚タ相反スルコトヲ

論ス

第六回 亞細亞ノ奴隸制ト歐羅巴ノ自由權ト

ハ俱ニ土地ノ形勢ニ因ルヲ論ス

第七回 亞弗利加及ヒ亞米利加ノ二大洲ヲ論

ス

第八回 大國ノ都城ヲ論ス

卷之十八 土質ニ關涉スル法律ヲ論ス

第一回 土質ノ法律ニ影響ヲ生スルノ論

第二回 同上

第三回 稼穡ノ道最モ開ケタルハ果シテ何國

ニ在ルヤノ論

第四回 新タニ邦土ノ肥瘠ヨリ生スル所ノ效

果

第五回 嶋嶼ノ住民ヲ論ス

第六回 人ノ勤勞ヲ以テ經營ニタル土地ヲ論

ス

第七回 人ノ勤勞ヲ論ス

第八回 法律ノ權衡ヲ論ス

第九回 亞米利加洲ノ土壤ヲ論ス

第十回 人口ノ増減ハ營生ノ方法ニ關涉スル

ヲヲ論ス

第十一回 野蠻ノ部落ヲ論ス

第十二回

農ヲ務メサル國民ノ公法ヲ論ス（按）
公法ト稱スルモノハ今日ノ所謂萬
國公法ニ非スシテ強ハ弱ヲ食シ敵
人ニ克テハ之ヲ奴隸ニスル
等ノ權利ヲ指スモノナリ

第十三回

農ヲ務メサル國民ノ民法ヲ論ス

第十四回

農ヲ務メサル國民ノ政權ヲ論ス

第十五回

貨幣ノ用ヲ知ル人民ヲ論ス

第十六回

貨幣ノ用ヲ知ラサル人民ノ民法ヲ
論ス

第十七回

貨幣ノ用ヲ知ラサル人民ノ政法ヲ
論ス

第十八回

法教ニ執迷スルノ人心ヲ論ス

第十九回

亞喇比人ノ自由ト韃靼人ノ隷従ト
ヲ併セ論ス

第二十回

韃靼人ノ實踐セル公法ヲ論ス

第二十一回

韃靼人ノ民法

第二十二回

日耳曼人ノ民法（按）歐羅巴ノ北部ニ
起リタル蕃民ノ總
称ニシテ數多ノ部落ノ聯合セルモノ
ナリ其中佛國ヲ征畧シテ其國ヲ建
テシモノヲ
佛朗機ト稱ス

第二十三回

佛朗機人ノ王位ヲ表スル裝飾ヲ論
ス

第二十四回

佛朗機王ノ婚姻ヲ論ス

第二十五回

チルデリック王

第廿六回 佛朗機王ノ成丁ヲ論ス

第廿七回 同上

第廿八回 日耳曼人ノ養子ヲ論ス

第廿九回 佛朗機諸王ノ性情殘忍ナルヲ論ス

第三十回 佛朗機人ノ國會ヲ論ス

第三十一回 佛朗機家治國ノ初世ニ方テ僧侶ノ

權甚々大ナリシヲ論ス

萬法精理卷之十六

何 禮之 譯

家内奴隸制〔按〕妻妾奴婢ノ類ノ法律ハ全ク土地ノ氣候ニ關スルヲ論ス

第一回 家中ノ服役ヲ論ス

家族ノ爲メニ奴隸制ヲ設ルアリ然レモ是レ固ヨリ家族ノ一部ヲ成スモノニ非ス〔按〕東洋ノ婦女ハ百境遇ニ在テ營ニ男子ノ玩弄物タル之ヲ或國ニ於テニ過キス故ニ家族ニ非スト云フ婦女ニ從事セシムル所ノ義務〔按〕歐洲諸邦ニ於テ婦男子ト苦樂ヲ共ト區別シテ家内ノ奴隸制ト稱ス可シ

第二回 南方熱帶ノ諸國ニ於テハ自ラ男女

ノ間ニ不平均アルヲ論ス

熱國ノ婦女ハ八歳乃至十歳ニシテ婚姻ヲ行フ可シ
默哈墨ハ五歳ナルカニヤリヲ娶リ八歳ニ至ルヲ
侯テ之ヲ枕衾ニ侍ヒシメタリ○アラビヤ及ヒ印度
ノ如キ熱地ニ於テハ八歳ノ少女ヲ娶リ九歳ニ至テ
閨門ニ服役セシム可シ（默哈墨ノ傳アルゼールニ於
テ九歳乃至十一歳ノ少女ノ懷孕セ
ルヲ目撃セリアルゼールノ史記）斯ノ如キ邦土
ノ人民ハ其幼齡常ニ婚姻ト並行スルヨリ婦女ノ一
十歳ニ至ルモノハ之ヲ目シテ暮齡トナスヲ以テ其
容色正ニ人ヲ動カスノ時ニ方テ智識未タ發達セス
智識漸ク發達スルニ迄テ容色已ニ枯凋ニ属シ絶テ
其智識ハ其容色ニ伴フヲ得ス夫レ婦女ノ男子ニ

於ル年嬌貌美ノ盛時ニ在テモ猶ホ失歡破親ノ事ナキ
ヲ保チ難ケレハ縱令其智識ハ發達スルアルモ容色
已ニ枯凋ニ傾クハ決シテ寵愛ノ機ヲシテ不斷活
潑ナラシムル所（男子ヲ籠絡スル）ノ大權ヲ掌握シ能
ハサルカ故ニ始終男子ニ隸従スルヲ免レス此等
ノ風土ニ在テ若シ法律ノ之ニ抗抵スルアラサルハ
ハ男子ハ一婦ヲ棄テ、更ニ一婦ヲ娶リ終ニ聚麀ノ
風其俗ヲ爲スニ至ルモ亦自然ノ勢ヒニシテ敢テ奈
何トモシ能ハサル處ナリ
温帶諸邦ノ婦女ハ其容色久シク嬌艷ニシテ衰ヘサ
ルヲ以テ壯年ニ到リ天癸達スルノ後始テ婚姻ヲ結

ヒ從テ其智識開ケ事理ニ通スルヲ俟テ子女ヲ生育
 シ其良人ト俱ニ暮齡ニ趨クヲ得ヘシ故ニ單ニ伉
 儷ノ日月ノ長キ一事ニ就テ之ヲ論スルモ亦自ラ男
 女ノ間ニ同等ノ勢ヒヲ成スモノニシテ乃チ一夫一
 婦ノ法律ノ由テ生スル所ナリ
 殊ニ寒國ニ至テハ男子ハ慣習ニ因テ劇烈ナル飲料
 ヲ用^リルヲ得ス故ニ往々放肆亂行ノ弊風アルヲ免
 レサルモ婦女ハ其天性ノ由テ然ラシムル所口常ニ
 謹恪ニシテ而モ操守ヲ破ル^ナケレハ其智慮ハ却
 テ男子ノ上ニ超乘スヘキノ利益ヲ有セリ
 抑モ造化ノ男子ヲシテ女子ト別アラシムルハ全ク

其智慮ト力量トニ在リ而シテ女子ニハ特リ冶容媚
 色ヲ賦與シソノ衰替スルニ從テ男子ヲ籠絡スルノ
 大權モ亦俱ニ衰替セシム然ルニ熱國ニ於テハ容色
 ノ嬌艷ナルハ纔カニ茲齡暫時ノ間ニシテ之ヲ智識
 發達ノ時マデ保持スル^ナ能ハス
 是故ニ一妻ノ外多娶ヲ許サ^ルノ法律ハ物理上ニ
 於テ原ト歐羅巴ノ風土ニノミ獨リ適當スルモノナ
 レハ彼ノ回教ノ容易ニ亞細亞ニ傳播シテ而シテ我
 カ西教ノ歐羅巴ヲ出テス遂ニ回教ヲシテ今日東洋
 諸邦ノ教化ノ權ヲ專占セシムル所以ナリ然リト雖
 モ至高ノ道理ノ存スルアリ其意ノ欲スル處ニ從テ

萬有ヲ安排シ一物ノ敢テ之ニ悖ルモノアル可ラサルカ故ニ人類ノ智慮ハ到底一籌ヲ此至高ノ道理ニ遜ラサルヲ得サルナリ（按實際ニ於テハ亞細亞ニ一夫一婦ノ制ヲ設ク可ラスト雖モ天意終ニ茲ニ到ル可シトノ義）

特殊ノ事由アルニ因テ羅馬ノワレニチニヤン帝ハ一夫數婦ノ制ヲ准許セリ然レ氏此法律ハ到底我カ歐羅巴ノ風土ニ適當セサルヲ以テオドシユス、アルカデウス、ホノリウス諸帝ノ廢止スル所トナレリ

第三回

一夫數婦ヲ娶ルノ制度ハ大ニ之ヲ扶持スル所ノ家資ニ關係アル事

已ニポリゲミ」ノ數妻、數夫ヲ准許セルノ邦國ニ於テ

ハ専ラ主夫ノ貧富ヲ以テ妻女ノ多寡ヲ定ムルノ基因ト爲サ、ル可ラスト雖モ然レ氏敢テ國民ノ豐富ナルニ因テ「ポリゲミ」ノ法律ヲ制定セシト謂フ可ラス是レ國民ハ貧窮ナルモ能ク同一ノ效果ヲ生スレハナリ之ヲ下文野蠻人種ノ處ニ詳論セン

「ポリゲミ」ノ富強ナル國民ニ於ルハ其奢侈ノ本體ニ屬セスシテ即チ奢侈ヲ致スノ媒灼ト爲ルモノナリ何ソヤ熱國ニ於テハ人民ノ需要繁多ナラス且妻子ヲ扶持スルノ費用極メテ低廉ナルヲ以テナリ

第四回

「ポリゲミ」ノ法律ハ人口ノ計表ニ

關係スル事

歐洲諸邦ノ統計表ニ據レハ男子ノ出産ハ常ニ女子ヨリ多數ニシテ彼ノ亞細亞ノ女子多クシテ男子少キモノニ全ク反對セリ故ニ歐羅巴ニ於テハ一夫一婦ノ法律アリ亞細亞ニ於テハ一夫數婦ヲ娶ルノ制度アル所以ニシテ齊シク其風土ニ關涉セルモノナリ

亞細亞ニ在テモ寒國ニ至テハ歐羅巴ニ齊シク男子甚タ多ク女子甚タ少ナキ所アルヲ以テ喇嘛教ノ教義ニ於テハ法律ヲ制定シテ一婦ノ數夫ニ嫁スルヲ准許セリ

如何ニ男女ノ生數ニ多寡不同アリト雖モ一夫ニシ

テ數婦ヲ娶リ或ハ一婦ニシテ數夫ニ事フヘキ法律ヲ制定セサルヲ得サルカ如キ事由アルノ邦國ハ絶テアル可ラサル所ナリ要スルニ唯甲國ハ婦女ノ偏多ナルニ依リ若クハ男女ノ偏多ナルニ依リテ「ポリゲミ」ヲ制定スルニ乙國ニ於ルヨリモ稍事理ニ照幾スト謂フニ過キサノミ

若シ史乘ノ記スル所ヲ信シテ吾ヲ欺カスト爲サハバンタムニ於テハ平均一男十女ノ口數ナリト云フ此等ハ極メテ「ポリゲミ」ノ制度ヲ立ルノ便宜トナル可シ

此一面ニ於テ予ハ單ニ「ポリゲミ」ヲ設ケシ所ノ理

由ヲ迷フルノミ決シテ其慣習ヲ視テ合理順情ノモ
ト謂フニアラサルナリ

第五回 マラバルノ法律ノ理由

マラバルノ海濱ニ住メル子イル人ノ部落ニ於テハ
男子ニシテ一婦ヲ共娶シ一婦ニシテ數夫ニ分事セ
リ此慣習ノ由テ出ル所ノ淵源ヲ省出スハ蓋シ難キ
ニアラス抑モネイル人ノ部落ハ概ネ豪族ニシテ時
常戰鬪ニ從事スレハ乃チ歐羅巴ニ於テ兵卒ニ婚姻
ヲ禁止スルト全一ノ主義ニ則リ其風土ニ應シテ此
習俗ヲ設立シ勉メテ婚姻ノ故ヲ以テ男子ノ義務ヲ
増サス從テ家族ニ縈纏スルノ憂ヲ減殺シ以テ専ラ

武勇ノ氣ヲ抖擻セシメ更ニ之ヲ支障スルモノ無カ
ラシムルニ在リ是レ此部落ニ於テ數人ニ一婦ヲ共
有セシムル所以ナリ

第六回 ホリゲミノ本性ヲ論ス

若シホリゲミノ許容セサル可ラサル特別ノ事情
ヲ放擲シテ唯其本性ニ就テ尋常ノ觀察ヲ下ス時ニ
ハ之ヲ視テ毫モ人類ノ裨益タル者ニ非ストナスノ
ミナラス之ヲ濫用シテ以テ人性ヲ戕害シ（按 戕害ノ
醜俗ヲ云
或ハ戕害セラル、所ノ男女ノ為メニモ裨益更ニ
無シト判決セサルヲ得ス而シ且其弊ハ男女ノ一身
ニ止ラズノ必ス援テ其子女ノ不利ト爲ラサル無シ

何トナレハ此制度アルニ於テ譬ヘハ一夫一婦ノ間
ニ二十人ノ子女ヲ生育センニ其父タル者ハ二十人
ノ子女ヲ汎愛スルヲ以テ固ヨリ其十母ノ各自ニ二
人ノ子女ヲ專愛スルノ親切ナルニ如カサレハ決シ
テ父母同一ノ心情ヲ以テ子女ヲ親愛シ能ハサルナ
リ若シ之ニ反シテ一婦ヲシテ數夫ニ分事セシムル
ノ制度ト爲スルハ父タル者ノ之ヲ親愛スルノ心ハ
單ニ其數多ノ子女ノ中ニハ或ハ一二人ノ我カ骨肉
ニ属スルモノアル可シト信用スルニ過キスシテ其
弊遂ニ一層著大ナルモノアル可キナリ

摩羅弩帝ハ白哲、黧黑、黃褐等各種ノ婦女ヲ宮寢ニ蓄

養セリ然レ氏此惡漢帝ヲ指ハ那ノ一種ノ婦女ヲモ
寵幸セサリシト〔按〕男色ニ溺ルル弊ヲ去フ

故ニ數多ノ妻妾ヲ蓄養スルハ之ヲ以テ男子ノ他ノ
婦女ヲ戀慕スルノ情ヲ抑制スルニ足ラス情火ハ殆
ト貪欲ト其趣ヲ一ニスルモノニシテ貨財益聚ルニ
從テ望蜀ノ情益旺盛ナルモノナリ

羅馬ダユスチニヤン帝ノ治世ニ方テ數多ノ理學者、耶
蘇教ノ方正端嚴ナルニ苦シミ去テ百兎西ニ遷移ス
ルモノアリ而シテ其最モ心目ヲ駭カセシハ該國ニ
於テ數婦ヲ娶ルヲ許サレタル男子ノ尚ホ姦淫ノ
罪ヲ犯セルモノアル是レナリ〔アガティヤスノ説〕東洋

テ婦女ヲ深閨ニ鎖ス所
以モ亦此理ニ外ナラス
抑モ一夫ニシテ數婦ヲ娶ル可キモノトセハ一ノ惡
行ハ常ニ百ノ惡行ヲ生スルモノナレハ終ニ性理ノ
敢テ許サ、ル所ノ情慾ヲ發動スルニ至ルヘイト謂
フモ決シテ過言ニアラサルナリ史傳ノ記スル所ニ
據レハ土耳其ノ都府ニ一ノ變亂アリテ人民群起シ
支丹^{アテメツト}ヲ廢シテソノ内寢ヲ劫掠セシニ曾テ
一人ノ婦女ヲモ視ル^ル無カリシト又アルゼールニ
於テモ閨中ニ婦女ヲ蓄フモノ甚々鮮少ナリト云フ
<sup>按一夫一婦ノ正道ニ則ラスポリゲミ^トヲ許
ス時ハ竟ニ男色ノ流行ヲ致スト謂フ義ナリ</sup>
第七回 數妻ヲ娶ル場合ニ於テハ其待遇ヲ

同一ニセサル可ラサルヲ論ス

已ニ數妻ヲ娶ル^トヲ許セル法律アレハ必ス又之ヲ
同一ニ待遇シテ偏頗ス可ラサルノ法律無カル可カ
ラス默哈墨ノ法律ハ四妻ヲ許容シ而シテ衣食ヨリ
唱隨ノ義務ニ至ルマテ百事皆ナ同一ニ分賦シテ其
間ニ毫モ厚薄アルヲ得ス又マルディヤンノ諸島ニ
於テハ三妻ヲ娶ル^トヲ許可シテ而シテ回教ト同様
ノ法律ヲ施行セリ

摩西ノ法律ニ據レハ若シ其子ノ爲メニ奴隸ヲ娶リ
而シテ復タ自主ノ婦女ヲ娶ル者アルモ決シテ衣食
及ヒ婚姻ノ義務ヲ減少ス可ラスト但シ新婦ニ供給

スル所ノ舊婦一供給スルヨリ饒多ナルハ敢テ妨
無シト雖モ新婦ヲ娶リシカ爲メニ從來舊婦ニ供給
セシ所ノモノヲ減火スルヲ許サ、リキ

第八回 男女別居ノヲ論ス

豐饒ナル邦土ノ人民カ恣ニ無數ノ妻妾ヲ養蓄スル
ハ全クホリダミ」ノ法律ノ之ヲ許容スルアルニ因
テナリ而シテ妻妾ノ數益多キニ從テ之ヲ深閨ニ幽
閉シ益男女ノ別ヲ嚴ニセサレハ以テ一家ノ安寧ヲ
保ツ」能ハサルハ即チ勢モ已ム可ラサル所ニシテ
其狀恰モ逋債ヲ負ツテ賠償ノ道ヲ得サル者ノ其身
ヲ隠レテ以テ債主ノ催促ヲ避クルニ異ラス是レ風

土溫暖ナル所ニ於テハ性理ノ發作スル其勢ト甚タ
猛烈ニレテ殆ト道義ヲ顧ミルニ暇アラサルモノア
リテ若シ男女相對シテ傍ラニ人ナキハ情慾ニ誘
掖セラレ忽チ檢束ヲ失シ一挑一就遂ニ之ヲ抑制ス
ル能ハサルヘシ故ニ此等ノ邦土ニ於テハ訓戒以テ
男女ノ欲情ヲ約束スルニ足ラス必スヤ門關鎖鑰以
テ防備スルヲ要スル所以ナリ

支那ノ或ル古學士ハ婦女ノ處室ニ獨居スルヲ見テ
能ク其情欲ノ發動ヲ抑制セシ男子ヲ稱シテ大德ノ
君子ナリト謂ヘリ

道ニ遺物ヲ拾フテ其主人ヲ尋ネ獨室ニ美人ノ在

ルヲ見テ心ヲ動サス、敵人ノ難ニ陷ルヲ聞キテ之ヲ救フ此三事ハ心術品行ノ正邪ヲ甄別スルノ試金石ナリ(支那脩身書ノ譯本)

第九回 家政 私政 國政 公政ノ關涉ヲ論ス

共和政ニ於テハ國士ノ分限、平等均一ニシテ各事ニ自由ノ利益ヲ寓スルヨリ敢テ恣ニ婦女ヲ壓制スルヲ無キモ風土ノ性質ニ從テ若シ婦女ヲ壓制セサルヲ得サルモノアラハ立君政ヲ設立スルノ外更ニ他ノ方策ナカル可シ是レ即チ東洋ニ民主政ヲ設クルヲ極メテ難キ所以ノ一ナリ

之ニ反レテ婦女ヲ奴隸視スルハ詢トニ能ク專制政

ノ真意ニ吻合スルモノナリ是レ此政體ハ嚴厲ヲ以テ齊シク萬有ヲ壓制スルヲ喜フカ故ニ古來吾人ノ、亞細亞ニ於テハ一家ノ奴隸制家政ト專制政府國政ト並馳連鑣シテ進行スルヲ目撃スル所以ナリ

專ラ一國ノ靜謐ヲ謀リ而シテ其安寧ヲ保ツカ爲メニ非常ノ順從ヲ要セサル可ラサルノ政府ニ於テハ婦女ノ通私失行等ヨリシテ主人ノ大害ヲ惹キ出スヲ亦鄙ナカラサレハ豫メ之ヲ深鎖幽閉セサル可カラス是レ臣民ノ行爲ヲ考檢スルニ遑ナキ政府ハ唯、婦女ノ人ニ交リ物ニ接スルニ就テ猜疑ヲ容レサル可カラサルヲ以テナリ

試ニ我國ノ婦女ノ淺薄ナル心情ト疎放ナル思慮ト其嗜欲好尚ニ加フルニソノ情火ノ炎々タルヲ以テニ恣ニ人ニ交リ物ニ接スルノ自由ヲ得セシメ而シテ之ヲ東洋政府ノ下ニ住マシメヨ果シテ一家ノ主父タル者ハ瞬間ノ安全ヲ保チ能フヘキヤ必ス其男子ハ到ル處嫌疑ヲ蒙ハリ到ル處仇敵ト爲リ遂ニ國中血河ノ溜々タルヲ見ルニ到ルヘシ

第十回 東洋ノ道義ノ淵源スル主義

妻妾多數ニシテ家族ノ情誼益離隔スルニ從ヒ法律ヲ制定シテ以テ其離隔セルモノヲ中心ニ集合セシメ其利害益乖異ハルニ從ヒ法律ヲ以テ其乖異スル

所ヲ一公點ニ歸向セシメサル可ラス

此目的ハ持リ婦女ヲ幽閉スルニ因テ達シ得ルモノ居多ナリトスルヲ以テ宜シク婦女ノ牆壁ヲ嚴ニシテ男子ト相見ユルコトヲ許サハル而已トラス更ニ又一門ノ中ニ就テ各婦其房ヲ殊ニシテ互ニ相交ラサラシム可シ此ノ如クナレハ各婦ハ道義、廉恥、貞節、沈黙、幽婉、平和、順依、愛敬、行實、之ヲ約言スレハ女子ノ天性ニ於テ大要事(即チ全ク其家族ヲ恪守シテニ心ナキ)タル處ノ方向ヲ得ルニ到ル可シ
婦女ノ履踐スヘキ義務ハ原来多端ニシテ而モ拔擢ニ暇アラスト雖モ亦其義務ノ特リ婦女ノ固有ニ屬

シテ他、自余、思想ニ感激シ遊樂ノ名ヲ荷ヒ且行
務ト稱スル所ノ事物ト全ク區別シ難キ所ノモノアリ

土耳其百兒西蒙古支那日本諸帝國ノ如キ東洋諸國
ヲ歴覽スルニ婦女ノ幽閉法益嚴重ナルニ從テ其品行
益清純ニシテ誠ニ讚美ス可キモノ多キ所以ハ他
ナシ大國ニハ必ス巨家豪族アリテ其富貴ヲ極ムル
ニ應シテ益能ク妻妾ヲ幽閉シテ之カ世事ニ干渉ス
ルヲ防制シ得ルヲ以テナリ
然レモ印度ノ如キハ無數ノ島嶼ト天然ノ地勢トニ
依リテ版圖ヲ分劃シテ數小國ヲ造リ之ニ加フルニ

(茲ニ論述スルニ暇ナキ)自餘ノ原由ノアルアリテ專
制政ヲ設立スルカ故ニ他ノ諸帝國ト亦同視ス可ラ
サル所アリ

印度ノ人民ハ概テ貧窮ニシテ或ハ人ノ物ヲ劫掠シ
或ハ人ニ物ヲ劫掠セラル、一アルモノ、富饒ノ家
ヲ有ル、一無ク其貴族ナル者モ饒カニ中人ノ財産ヲ
有ツニ過サレハ稍生計ノ豊裕ナルモノハ之ヲ呼テ
富家ト稱セサルハ無シ故ニ嚴ニ婦女ヲ幽閉スルノ
資力ニ乏シク又之ヲ制束シテ矩ヲ踰ヘサラシムル
一能ハサルヨリ其品行ノ頽壞シテ殆ント言フ可ラ
サルモノ實ニ屈指ニ堪エサルナリ

吾人若シ眼ヲ印度ノ婦女ニ投タハ彼ノ風土ノ自由
ニ任シテ敢テ其惡質ヲ矯正セサルノ弊終ニ放肆淫
佚ノ極點ニ達スルヲ知ル可キナリ寔ニ印度人ノ
專ラ性理ノ作用ニ役セラレテ廉恥ノ之ヲ約束スル
無キハ吾人ノ意表ニ出ルモノアリ○パンタンニ於
テハ婦女ノ淫慾甚タ熾烈ニシテ暴戾ニ涉リ男子ハ
其強迫ノ所行ヲ防クカ爲メニ必ス一定ノ衣裳ヲ著
用セサル可ラスノ年デキヤシ十歳十一歳ニ至レハ女子
者其女子ヲ獨居セシムルハ罪惡ナリトシテ必ス之
カ配偶ヲ求メテ婚姻ヲ結ハシム○バシタムニ於テ
若シ女子ニ淫行ナカシメント欲セハソノ十二三
歳ニ至ルヲ俟テ必ス婚姻ヲ爲サシメサル可ラス
スミット氏ノ説ニ據レハギンニ一ノ小王國ニ於テモ

之ニ異ナルヲ無ク男女俱ニ其固有ニ属セル法律（按）
節ヲモ遺失スルニ至レリト婦女男子ヲ見レハ忽
ニ從ハサレハ之ヲ威スニ其夫ニ告訴スルヲ以テス
○婦女竊カニ男子ノ寢床ニ入りテ之ヲ醒起ス若シ
其情願ヲ聽カサルギンニ一ノ紀行第二編
ヲ以テスト云フ

第十一回 全クポリゲミニ因縁セサル家

内ノ奴隸制ヲ論ス

東洋ノ或地ニ於テ妻妾ヲ幽閉セサルヲ得サルハ
敢テ其多數ナルニ因ル而已ナラス亦風土ノ致ス處
蓋シ居多ナリトス讀者若シユールノ地方及ビ一婦ヲ
娶ルノ教法ヲ守ル處ノ西印度ニ在ル葡萄牙藩屬地
ノ婦女カ其自由ヲ得ルニ由テ胚胎セシ所ノ詭謀陰

逆毒殺暗刺等ノ罪惡ヲ視テ之ヲ土耳其百鬼西印度
支那日本ノ婦女ハ淑婉端正ナルニ比較スル時ハ假
令一夫一婦ノ制度アル地方ニ於ルト雖其風土ニ依
リテ多數ヲ娶ル所口ニ齊シク必ス之ヲ男子ト離隔
セサル可ラサル所以ヲ悟得ス可シ
此等ハ當ニ其國ノ風土ニ從テ決定ス可キ事ナルモ
我カ北國ノ婦女ノ如キ行儀淳良情欲淡寧ニシテ專
ラ愛敬以テ其心思ヲ支配シ以シク謹慎ヲ加フレハ
之ヲ約束シテ亂ニ及ハサル者ニ至テ徒ニ之ヲ幽閉
スルハ實ニ無用ニ屬スルモノナリ
抑モ男女俱ニ交際ノ自由ヲ占得シ而シテ嫵媚ノ姿

態ヲ具スルノ種性婦女ヲ以テ社會ヲ粧點スルノ文飾
ト爲シ妻ハ其夫ヲ歡娛セシムルノ地位ニ居テ併セ
テ衆人ヲ怡悦セシムルノ風土ニ棲息スルハ豈人生
ノ幸福ニアラスシテ何ソヤ

第十二回 天性ノ羞恥ヲ論ス

婦女ノ失操ヲ賤惡スルノ一點ニ於テ宇内ノ諸國皆
ナ其揆ヲ一ニセサル無キハ蓋シ造化ノ人類ニ命示
セル所ニシテ抑モ之ニ賦スルニ進動ノ性ト退守ノ
性トヲ以テシ其二性ニ復タ各其欲スル所ヲ付與シ
一ハ勇氣ヲ以テ動キ一ハ羞恥ヲ以テ守ラシメ而シ
テ各入ニ數十年ノ天壽ヲ賜フテ其保存ヲ謀ラシム

又其種類ノ斷絶セサランカ爲メニ瞬時ノ間各其情
欲ヲ違スルヲ許スモノナリ
故ニ性法ハ廉恥謹慎ニアラサレハ遵守ス可ラサル
モノニシテ失操荒淫ヲ以テ性法ノ理ニ循フト認ム
ルノ妄誕ナル直チニ之ニ背反スルト謂フモ決シテ
不可ナル所ナレ
加之智識アル生靈^人ハ自己ノ虧缺ヲ覺ルノ天性ナ
カル可カラス故ニ造化主ハ人ヲシテソノ虧缺ヲ覺
ラシメンカ爲メ特ニソノ心思ノ中ニ廉恥ノ一物ヲ
賦與セリ

然ルヲ以テ若シ其國風土ノ作用甚タ暴烈ニシテ終

ニ男女ノ性法及ヒ智識アル生靈ノ性法ヲ破毀スル
ニ至ルハ制法ノ地歩ヲ占ムル者ハ須ラク風土ノ
惡質ニ抵抗シテ性理ノ元法ヲ挽回スルノ趣意ニ基
キ是ニ因テ以テ人法ヲ制定ス可キナリ

第十三回 嫉妬ヲ論ス

一國ノ人民ニ就テ之ヲ論スルニ嫉妬ノ原因ニ二類
アリ即チ其一ハ情欲ニ出ルモノ其二ハ風俗法律ニ
由來セルモノナリ而シテソノ情欲ニ出ルモノハ素
ト火氣ノ狂發セルモノナレハ其勢ヒ極メテ劇烈ナ
リ其風俗法律ニ由來セルモ時トシテハ恐ル可キニ
至ルモ之ニ比スレハ概チ稀薄ニシテ而モ其感動ノ

カヲ具スルヲ蓋シ鮮ハナリトス

第一類ハ愛ノ弊ニシテ乃チ愛ノ一字ヨリ淵源シ来
リ第二類ハ人民ノ風俗一國ノ法律乃至教法ニ因テ
發生スルモノナリ默哈墨ハ其徒ニ妻妾ヲ監守スル
ヲ諱告セリ孔子ノ論理
モ之ニ異ナルヲ無シ
概スルニ嫉妬ハ風土ノ作用ニ由テ生シ而シテ復タ
此作用ヲ醫治スルモノナリ

第十四回 東洋ノ家政ヲ論ス

東洋ノ人民ハ妻ヲ換フルヲ甚タ數ニシテ家政ヲ操
持セシムルニ遑アラサレハ此職ヲ舉ケテ閨人ニ委
任シ乃チ之ニ鎖鑰ヲ司トラシメ之ニ家族ヲ管理セ

シメタリ曾テジヨン、チャルデヤン氏ニ聞ク有夫ノ女
ハ時季ニ應レテ其夫ヨリ衣服ヲ賜フヲ猶ホ父ノ其
子ニ於ルニ異ラスト故ニ家婦タル者ハ絶ヘテ他ノ
邦土ニ在テハ第一ノ義務ト認メラル、處ノ職掌ニ
從事スルヲ無シ

第十五回 離婚及ヒ休婚ヲ論ス

夫婦ノ情好互ニ相和セサルヨリ雙方ノ承諾ヲ經テ
彼此離散スル之ヲ離婚ト云フ、全ク夫婦ノ中其一人
ノ意志ニ出テ或ハ其便益ヲ謀リ更ニ他ノ一人ノ意
志便益ヲ問ハスニテ離散スル之ヲ休婚ト云フ讀者
其間ニ區別ノ自ラ存スルヲ知ラサル可ラス

時トレテ婦女ヨリ休婚セサルヲ得サルノ場合アリ、然レ氏常ニ之ヲ行フ極メテ難キカ故ニ、カノ休婚ノ權ヲ獨リ男子ニ與ハテ婦女ニ與ハサルノ法律ハ最モ壓制ニ涉ルヲ免レサルモノト謂フ可シ、何トナレハ男子ハ一家ノ長タルヲ以テ婦女ヲ約束シテ其義務ニ從事セシメ或ハ其怠慢ヲ微責スルニ許多ノ手段ヲ專有スレハ夫ノ妻ヲ出スハ畢竟新タニ其權ヲ濫用スルニ過キサルモ、婦女ノ其妙齡ニ方テ紅顏冶容ニ因テ博シ得タル利益ハ全ク他日暮景ニ迫ルニ及テモ、尚ホ良人ニ往時ノ快樂ヲ追憶セシメ以テ一朝ニ厭棄セラレサルニ在ルヘキニ、多年一夫ニ奉

事シリノ容色ノ枯凋スルノ後一朝夫家ヲ去リテ再ヒ更ニ新替ヲ求ムルカ如キハ豈不幸ノ大ナルモノナラスヤ

然ラハ則チ男子ニ休婚ノ權ヲ付與スルノ法律アル國土ニ於テハ宜シク亦之ヲ婦女ニ付與スルヲ以テ通則ト爲サル可カラサル而已ナラス婦女ヲ視テ家内ノ奴隸ト爲ス所ニ於テハ婦女ニ與フルニ休婚ノ特權ヲ以テシ男子ニハ唯、離婚ヲ許スノミニシテ而シテ後始メテ公平ヲ得ルモノト謂フヘシ若シ妻妾ヲ深閨ニ幽閉スルキハ其夫ヲシテ妻妾ノ行儀ノ相及セルヲ以テ之ヲ離去セシム可ラス是レ

妻妾ノ行儀ノ諧和セサルハ全ク其夫ノ過失ニ屬ス
レハナリ

石胎ヲ以テ其妻ヲ去ルハ一夫一婦ノ法律ヲ設クル
國ノ外決シテ之アルノ理無シ何リヤ數妻ヲ娶ル所
ニ於テハ假令之アラシムルモ敢テ夫主ノ利害ニ關
係セサルヲ以テナリ之ニ因テ耶蘇教ノ國民モ其妻
妾セサル可ラス
ト謂フニアラス

マルデヤ^{フヤ}ニノ法律ハ一タビ出シタル所ノ妻ト再
婚スルヲ准許セリ曩キニ出シタル妻ト再婚スル
之ヲ好ム之ニ反レテ墨西哥ノ法律ハ休婚ノ妻ト再
合スルヲ禁シ之ヲ犯ス者ヲ罰スルニ死刑ヲ以テ

セリ蓋シ墨西哥ノ法律ハ其解婚ノ時ニ方テモ婚姻
ノ終身渝ル可ラサルヲ明示スルカ故ニ之ヲマル
デヤ^{フヤ}ニノ法律ニ比スレハ更ニ一層ノ理趣アルヲ
覺フマルデヤ^{フヤ}ニノ法律ノ如キハ其輕々婚ヲ結ビ
テ輕々之ヲ休ムルヲ殆ンド兇戲ニ齊シト謂ハサル
ヲ得ス

墨西哥ノ法律ノ離婚ニ限リテ再合ヲ准許セシハ全
ク自ラ好ミテ休婚シタルモノニ再合ヲ許サハルノ
理趣ナリ蓋シ休婚ハ往々一時ノ短氣ト情欲ノ激動
トニ出ルモ離婚ハ熟慮深謀ニ成ルノ故ナル可シ
離婚ハ曩政事上ノ利用タルヲアルモ民事上ノ利用

二至テハ全ク夫妻ノ利益ニ止ルノミニシテ其子女ノ爲メニハ常ニ良圖ニアラサルナリ

第十六回 羅馬ノ休婚離婚ヲ論ス

ロムルスノ法律ハ男子ニ許スニ淫行ヲ犯シ毒藥ヲ施シ或ハ偽鑰ヲ製セシ妻ヲ休止スルヲ以テシ而シテ敢テ此權ヲ婦女ニ與フルヲ無シ然ルニフルタルキハ此法律ヲ評シテ嚴酷ヲ極メタルモノト謂ヘリ
雅典人ノ法律ニ於テハ婦女ニ休婚ノ權ヲ受用セシメタルヲ敢テ男子ト異ナルヲ無シ羅馬ニ於テモ國初ノ婦女ハロムルスノ法律アルニ拘ラス皆ナ此權ヲ所有セシニ據テ之ヲ見レハ此法律ハ羅馬ヨリ理

事官ヲ雅典ニ派遣シテ其制度ヲ採拾シ之ヲ十二牌ノ律典ニ掲載セシ所ノ一ナルヘシ

シセローハ休婚ノ理由ヲ論シテ十二牌ノ律典ヨリ出セシモノト爲セリ蓋シ十二牌ノ律典ニ因テ當初ロムルスカ制定セシ休婚ノ條款ヲ増加セシヲ瞭然疑ヲ容ル、所ナシ

離婚ノ權モ亦十二牌ノ律典ヲ以テ其淵源ト認メサルヲ得ス何トトレハ夫妻各自ニ休婚ノ權ヲ得タル上ハ往々其相互ノ承諾ニ依リテ分離スルノ權アルハ理ノ最モ略易キ所ナレハナリ

法律ハ敢テ離婚ノ原由ヲ開陳スルヲ要セサルモ事

理ニ就テ之ヲ論スル片ハ休督ノ時ニ於テハ必ス之
ヲ開陳ヒシメサル可ラス蓋シ法律ニ於テハ何等ノ
原由ヲ認メテ休督ノ判基ト爲シ是ニ依テ其許否ヲ
定ム可シト雖モ離督ノ原由タル夫婦ノ不和反目ニ
至テハ更ニ之ヲ制止スヘキノ道理アラサルヲ以テ
ナリ

下文ノ事實ハデキオニシユース、ハリカルナセシス、ワ
レリュス、マキシムス及ヒアオリュス、ゲルリュスノ諸書ニ
散見スト雖モ予ハ其必然ヲ信シ能ハサルナリ其言
ニ曰ク羅馬ニ於テ男子ハ其妻ヲ休止スルノ權ヲ有
セシモ然モ其伉儷ノ甚タ篤キニ因テカルウキリニス、

ルガーカ石胎ノ故ヲ以テ其妻ヲ去リシ迄殆ント五
百二十年ノ間一男子ノ此權ヲ實施セルモノ無シト
ハリカルナセシス及マキシムスニ據ルハ五百二
十年、ゲルリュスニ據レハ五百三十年ト爲ル、然レモ皆
ナルガ一ノ統領タリ然レモ吾人ハ唯一國ノ人民カ
シ年代ニ符合セス法律ニ依リテ此權ヲ賜與セラレシニ敢テ一人ノ之
ヲ用非シモノナシト云フヲ見テ當時ノ人心ハ實ニ
稀罕ノモノト想像スルニ過サルノミ○カリオラヌ
スハ罪ヲ得テ國ヲ去ルニ臨ミ其妻ヲ諭シテ更ニ多
福ノ男子ニ事ヘセシメタリ○前ニ論セシ如ク十二
牌ノ律典ト羅馬人ノ風俗トヲ以テ大ニ口ムルスカ
制定セシ法律ヲ擴充セシト云フニ據テ論理ヲ立ル

其ハ已ニ一人ノ休婚ノ權ヲ用ユルナキニ故ラニ之
ヲ擴充スルハ果シテ何ノ爲メナルヤ、人民ハ伉儷甚
タ篤クシテ絶エテ休婚スルモノナキニ、何ソ制法者
ニ限リテ夫婦ノ恩愛ハ獨リ人民ヨリ更ニ稀薄ナリ
シヤ、且法律ノ制定ニ因リテ續々其風俗ヲ頹壞セシ
トハ抑モ何ノ故ゾヤト謂ハサルヲ得ス實ニ解ス可
ラサル處ナリ

茲ニ論述スル事實ニ於テハ各人皆ナ疑ヲ起シテ驚
愕セサルモノナキモ、プルタルキノ二論ヲ比較參觀
スルハ直ニ釋然涣散スルヲ得ヘキナリ其論ニ曰
ク王室ノ法制ハ前ニ出セル三事ノ外漫ニ其妻ヲ出

シテ休婚ヲ爲スモノハ財產ノ一半ヲ割キテ之ヲセ
ーレス廟神ニ獻納セサルヘカラスト是レ此罰典ヲ甘
受スル者ニアラサルヨリハ敢テ事故ナクシテ休婚
ヲ爲サシメサルノ理ナリ又曰クロムルスノ法制ヲ
設ケテヨリ二百七十一年ノ間一人ノ休婚ヲ爲ス者
アラザリシガカル年ハスルガーニ至テ石胎ノ故ヲ以
テ始メテ之ヲ行ヒ遂ニ之ニ因テ休婚ノ權ト其原由
トヲ増加セシテ實ニ十二牌ノ律典ニ先ツ七十一
ナリ羅馬スノ法制ニハ石胎ヲ以テ休婚ノ原由ト
レテ其妻ヲ去リシカ故ニ罰典ニハ監察官ノ令旨ヲ奉
廢トラル、一ヲ免シト見ヘタリ
プルタルキノ説ニ據レハカル年ハスルガーハ其妻

ヲ愛シテ措カサルニ、監察官ソノ子女ヲ生育セサル
ヲ見テ、共和政ノ爲メニ子女ノ繁殖ヲ欲シ強テ其妻
ヲ太ルノ誓約ヲナサシメ、ルガーハ之ニ因テ大ニ人
民ニ憎惡セラレタリト讀者宜シク羅馬ノ人民ガ、ル
ガーヲ憎惡セシ實因ヲ剖析スルニ先チテ必ス其思
慮氣質ヲ悟得セサル可ラス何ソヤルガーカ其妻ヲ
去リシハ全ク一私人ノ事ニ屬シテ固ヨリ人民ノ關
涉スル所ニアラサレハ敢テ其憎惡ヲ受クルニ由シ
無カル可シト雖モ然レモ人民ノ憎惡セシ所ハルガ
一カ其妻ノ石胎ナルヲ以テ之ヲ休止シ、共和政ノ為
メニ子女ヲ生育スヘキ旨ヲ監察官ニ誓約セシヲ視

テ乃チ之ヲ以テ監察官カ漸次ニ人民ニ推シ及サン
一ヲ欲スト思維スレハナリ○此著撰ヲ通覽スル片
ハ斯ノ如キ規則ニ因テ人民ノ不滿ヲ招クヘキ所以
ヲ發明スヘシ第二十三卷第三回然レモブルタルキハ事實ヲ
推究セシモ自餘ノ諸學者ハ單ニ其制度ノ奇異ナル
ヲ論スルカ故ニ往々其言ノ彼此相反シテ合セサル
モノ必シトセス

萬法精理卷之十六畢

萬法精理卷之十七

政事上ノ奴隸制モ亦土地ノ氣候ニ關涉スルヲ論ス

第一回 政事上ノ奴隸制

政事上ノ奴隸制ノ其土地ノ氣候ニ相關スルハ毫モ民事上及ヒ家内ノ奴隸制ニ異ルナキモノナリ之ヲ此卷一篇ノ論旨トス

第二回 各國ノ人民ニ勇怯ノ差アルヲ論ス
前章已ニ論セシカ如ク炎熱ノ人民ニ於ルヤ其體氣ヲ慢弛シ其心カヲ萎靡セシムルモノナレハ夫ノ寒地ノ人民ノ其心體強壯ニシテ恒ニ忍耐不撓以テ事

業ヲ遂ルニ足ル所以ナリ而シテ此差別ハ獨リ寒暖懸殊ナル二國ニ就テノミ始テ知リ得ヘキモノニ非ス縱令一國ノ中ニ於テモ其南北ノ相距ルニ從テ亦瞭然トシテ見ルヲ得ヘキナリ譬エハ支那朝鮮ニ於テモ其北部ノ民ハ南部ノ民ヨリ更ニ剛勇ノ氣象ヲ存スルカ如シ

其理斯ノ如シ故ニ熱地ノ民ハ怯懦ニシテ常ニ政府ノ奴隸タルヲ甘シ寒國ノ民ハ剛勇ニシテ能ク其自由權ヲ維持シ得ルハ全ク自然ノ勢ヒニ因ルモノニシテ敢テ怪シムニ足ラサル所ナリ

亞墨利加洲ニ於テモ亦此實因アリ見ヨ彼ノ墨西哥

白露ノ如キ君權無限ノ古帝國ハ常ニ赤道直下ニ近キ熱地ニ在リテ夫ノ自ラ部落ヲ成シ充分ノ自由ヲ占得スル國民ハ皆南北二極ニ接タル寒地ニ居レリ

第三回 亞細亞ノ氣候ヲ論ス

或ル游歷家ノ紀行ニ曰ク亞細亞洲ノ氣候ヲ論スレハ其北部ノ大陸即チ南ハ北緯四十度ニ起リ北ハ北極ニ至リ西ハ魯西亞ノ邊疆ヨリ東ハ大東洋太平洋ニ達スル間其氣候ノ互寒ナルハ實ニ宇内無ニナルモノニシテ而シテ此廣漠タル平原ハ烏拉ノ山脈アリテ其東西ヲ限劃シ北ハ西伯利亞ニ接シ南ハ獨立韃靼ニ隣レリ曰ク西伯利亞ノ氣候ハ寒冷極メテ酷烈

ニシテ一二耕耘ヲ施ス可キ地方ヲ除クノ外、滿野唯
松杉灌木ノ雜生スルヲ見ルノミ、間ニ魯西亞人ノ爰
ニ植民スル在リト雖モ一ノ開墾ノ功ヲ奏スルモノ
ナシ、曰ク土人ハ蠡爾タル番夷ニシテ各自ニ部落ヲ
成シテ散居スルト毫モ亞米利加洲ノ北部ニ在ル加
拿他ノ蠻民ニ異ラス曰ク此地方ノ寒氣斯ノ如ク夫
レ甚シキ所以ハ、其土地ノ高敞ナルト、其山脈ノ南ヨ
リ北ニ赴クニ從テ漸ク陵夷シテ一ノ北風ヲ遮蔽ス
ル所ノ高山無キトニ因ルモノナリ然ルニ歐羅巴洲
ニ於テハ諾威及ヒラブランドノ山脈アリテ之カ屏
障ト爲リ、能ク北風ヲ遮蔽スレハ瑞典ノ都府ストツ

クホルムノ如キ北緯五十九度ノ地ニ位スト雖トモ
能ク穀果、樹木繁茂シ其極北ノアボーハ六十一度ヨ
リ六十三度ニ及フモ尚ホ銀鑛ヲ開キ土地ヲ耕ス
ヲ得タリ

又曰ク獨立韃靼ハ西伯利亞ノ南ニ在ルモ、其氣候ノ
甚タ寒冷ナルヨリ畜牧ニ從事スルノ外絶テ樹藝ニ
適當セサレハ、アイランドニ於ルカ如ク一望荆棘
ノ漱茫タルノミニシテ、支那印度ニ接セル地方ニ至
テ始テ稗黍ノ類ヲ種ユ可シト雖モ決シテ米麥ヲ成
熟セシムル能ハス又支那韃靼ノ如キハ北緯四十三
度ニ起リテ四十五度ニ至レハ其地位固ヨリ佛蘭西

ノ南部ト一樣ナル可キニ、大抵一年ノ中八九月ノ間ハ常ニ氷雪堆積シテ其寒氣殆ントアイスランドニ異ラス故ニ其大東洋ニ濱セル地方ニ於テハ支那人ノ邊防ノ為メニ設ケタル城營ノ外、僅カニ四五ノ府邑アル而已ニシテ其他獨立韃靼ノ如キハ特ニブルトルケスタン、カタイニ過キス而シテ此地方ノ斯克寒冷甚シキ所以ハ是レ土質ニ多量ノ硝砒ヲ含ムト殊ニ地勢ノ高敞ナルトニ因ルモノナリ○宣教使ズルビースト曰ク萬里ノ長城ヲ出テ北行未タ一百里ニ足ラス漸クカフハミールン河ノ源ニ到リテ之ヲ北京ニ比スルキハ其水平ヲ距ルヲ殆ント三千尺

余ノ高キニ及ヘリ、而シテ此地方ハ亞細亞群河ノ發源ノ地ニ屬スト雖モ其旱澇ノ極メテ偏多ナルヨリ河畔湖邊ニ非レハ決シテ人烟ヲ認ルナシ此ニ據見レハ韃靼ハ山上ニ在ル平原ノ類ナリ此ニ據テ之ヲ觀レハ亞細亞ハ西伯利亞、韃靼ノ如キ寒地ノ直チニ土耳其百兒西、印度、支那、高麗、日本ノ諸熱國ニ接スルカ故ニ寒熱ノ中部ニ位スル一ノ溫暖ノ地無シト謂ハサルヲ得ス

歐羅巴洲ニ於テモ瑞典、挪威ノ氣候ト西班牙、伊太利ノ氣候ノ如キ寒熱大ニ懸隔スルナキニ非サルモ而モ南ヨリ北ニ進ミ一度ヲ加フルニ從テ漸次ニ寒冷

ヲ増スカ故ニ接壤ノ邦土ニ於テハ殆ント冷熱ノ差
ヲ覺フヲ能ハス夫ノ亞細亞ノ頓ニ冷國ヲ出テ、熱
郷ニ入ルノ甚シキモノ無シ是レ歐土各國ノ氣候ニ
彼此ノ大差ナク寒熱ノ中ヲ得テ温涼ノ地ニ位スル
モノ極メテ多キ所以ナリ

故ニ亞細亞ニ於テハ寒地ノ勉強剽勇ノ民直チニ熱
地ノ怯懦怠惰ノ民ニ接スルヲ以テ、熱地ノ民ハ常ニ
寒地ノ民ニ征服サレテ其奴隸タルヲ免レサルモ
歐羅巴ハ氣候ニ大差ナク人民ノ氣象モ又相等シキ
ヲ以テ剽勇ノ民ハ剛勇ノ民ニ對シテ相下ラス、是レ
亞細亞人ハ柔弱ニシテ動モスレハ他人ニ征服サレ

テ奴隸ト爲リ歐羅巴人ハ剛勇ニレテ常ニ其自由ヲ
享得スル原由ナリ蓋シ此說ハ未タ世人ノ曾テ論及
セサル所ニシテ亞細亞ニ於テハ從來能ク自由ヲ得
タルノ人民ナキモ歐羅巴ニ於テハ其時ノ形勢ニ從
テ自由ノ消長ヲ致ス無キ能ハサル所以ナリ

一時魯國ノ貴族ハ或帝ノ暴威ニ壓制サレテ奴隸ノ
境遇ニ墜落セシヲアリシカ氏常ニ不平ノ色ヲ顯メ
其羈軛ニ甘服セサリキ是レ之ヲ熱地ノ人民ニ望ム可
ラサル所ニノ果シテ能ク暫時ノ間稍貴紳政ノ體裁
ヲ建ツルヲ得タリ○此外ニ北方ニ一王國按波蘭ノ其
法律ヲ失墜セルヲ目撃セリ然レ氏幸ニ氣候ノ作用

ニ賴テ他日能ク恢復ノ功ヲ奏スヘキヲ信スルナリ

第四回 氣候ニ由テ起ル所ノ效果ヲ論ス

前文ニ論スル所ハ皆ナ歷々史乘ニ載セテ以テ證據トスルヲ得ルモノナリ抑モ亞細亞ノ他國ニ征服セラル、一前後十三回ノ多キニ及フモ其北人ノ南部ヲ併スル一十一回ニノ南人ノ北地ヲ征セシ者ハ實ニ二回ニ過キス今審カニ之ヲ言ヘハ太古ジヤン人ノ為メニ征服セラル、モノ三回、中世メーデ、百兒西人ニ併有セラル、一各一回、其後希臘人、亞刺比亞人、蒙古人、突厥人、韃靼人、百兒西人、アフガン人、ニ臣從セシ一亦各一回ナリトス然レモ是レ特ニ亞細亞北

地ノ一部ヲ舉ルモノニシテ夫ノ古來最モ多數ノ沿革ヲ經タル南部ノ征討ニ至リテハ畧シテ之ヲ言ハサルナリ

然ルニ歐羅巴ハ希臘人非左西人カ始メテ其地ニ植民セシ以來今日ニ至ルマテ僅カニ四回ノ大沿革ヲ經歷スルノミ即チ其一ハ羅馬人ノ雄畧其二ハ羅馬衰世、北狄ノ入寇其三ハ查理曼ノ一統其四ハノルマン人ノ侵入是レナリ而シテ此四回ノ大沿革アルモ詳カニ當時ノ形勢ヲ推究スルハ全洲ノ國力ノ強弱頗ル其平均ヲ得テ曾テ彼此霄壤ノ大差アルナリ、故ニ羅馬人ノ亞細亞ヲ征服スルニ方テ連戰皆ナ勝

ツヲ恰モ無人ノ地ヲ行クカ如キモ歐羅巴ノ諸國ヲ
兼併セシ時ニハ多年ノ兵馬ヲ勞シ幾回ノ苦戰ヲ經
テ漸ク其一統ノ業ヲ成達シ其後北部ノ夷狄カ多年
出沒ノ羅馬ヲ蹂躪シ查理曼カ風雨ニ擲沐メ天下ヲ經
營シノルマン人カ數回ノ艱險ヲ冒シテ中原ニ橫行
スルヲ得シモ決シテ易々ノ事業ニ非リシヲ知ル可
キナリ是レ歐羅巴ニ於テハ強弱ノ勢恒ニ其平ヲ失
セサルヨリ往昔人ヲ亡セシモノハ今日復タ人ノ亡
ス處トナリテ氣運彼此ノ間ニ循環シ長ク一國ニ底
止セサル所以ナリ

第五回 亞細亞北部ノ人民ト歐羅巴北部ノ

人民トハ齊シク其南部ヲ征服セシ
モノト雖モ其效果ハ甚タ相及スル
ヲ論ス

歐土北部ノ國民ハ自主人ノ親ラ他國ヲ征服セシモ
ノナリ〔接全ク自己ノ利益ノ爲メニ戰フヲ云フ〕亞細亞北部ノ人民ハ奴
隸ニシテ特リ君長ノ功名心ヲ成就セシムルカ爲メ
ニ他國ヲ征服セルモノナリ

蓋シ韃靼人ノ如キハ亞細亞南部ノ世寇ニシテ數回
之ヲ畧取シテ帝國ヲ建テシト雖モ敢テ人民ノ自由
權ノ爲メニ勤勞スルモノニ非サルヲ以テ其君長ハ
先ツ南部ノ降民ヲ奴隸ト爲シ然ル後同一ノ羈軛ヲ

以テ復タ北部ノ捷兵ヲ壓制シ終始奴隸ノ域ヲ免レ
シマス故ニ今日支那領韃靼ト稱スル地方ハ君長
ノ壓制極メテ苛酷ニシテ其人民ヲ驅テ雄圖ノ犠牲
ニ供スルヲ敢テ支那帝ノ專制ニ属スル本國ト差異
アルナシ

又支那ノ史乘ニ就テ國帝カ支那人ヲ韃靼ニ遷移セ
シ事跡ヲ閱スルニ支那人ノ邊地ニ移ルモノハ變シ
テ韃靼人ト爲リ本國ノ支那ヲ視ルヲ實ニ兩立セサ
ル仇敵ノ如キニ至ルト雖モ其政治ヲ顧ミルハ毫
モ本國ニ異ルヲナクシテ終始其卑屈畏從ノ氣質ヲ
脱スル能ハス

又韃靼人カ嘗テ其征服セシ所ノ土地ヨリ驅逐セラ
レ去テ本國ニ歸ルニ及テハ一旦南部ノ地ニ於テ習
慣セル卑屈畏從ノ氣質ヲ本國ノ人民ニ傳染スルヲ
往々以ラス此事支那ノ史乘ニ載スル所ト我カ歐洲
ノ古史ニ傳フル所ト全ク符節ヲ合スルカ如シヤ人
ハ三タヒ亞細亞ヲ征服シ三タヒ故ニ概シテ之ヲ言ヘ
ヒ其土地ヨリ驅逐セラレタリ故ニ概シテ之ヲ言ヘ
ハ韃靼人種ハ常ニ亞細亞諸國ノ人民ニ肖似スルヲ
以テ乃チ專制政ノ君長カ南部ノ人民ヲ制治スル者ヲ
將テ直チニ韃靼人ニ施シ鞭撻シテ之ヲ駕馭シ得ヘ
キモ歐羅巴ノ人民ハ其氣質全ク之ニ相反シテカメ
テ斯ノ如キ卑屈ノ風俗ヲ脱シ自由ノ權利ヲ逞クセ

ント欲スルヲ以テ亜細亞ニ於テ刑罰ト稱ノ敢テ怪
シマサル者モ歐羅巴ニ於テハ暴虐ト看做シテ毫モ
之ニ服スルナシ

是レ乃チ東羅馬ノ帝國ヲ滅シタル韃靼人ハ隨所其
人民ヲ奴隸トナシテ專制ノ政府ヲ設ケタリト雖モ
西羅馬ヲ斃セシ所ノゴット人種ハ其蹟ニ立君政ト自
由權トヲ立テサルヲ得サリシ所以ナリ

著名ナルリュドベッキ氏ハ其所著ノ「アトランチックト題
セル書中ニ專ラスカンダウキヤ瑞典、挪威、ノ事蹟
ヲ讚美セシト雖モ曾テ此國ハ歐土諸邦自由權今日ノ事蹟
ノ受用セル諸自ノ發源ノ地タリシニ依テ其人民ハ
由ノ尤ナルモ

宇内ニ肩ヲ比ス可キ無キ高尚ノ地位ニ在リシヲ
記セサルハ遺憾ト謂フヘシ

ジョルダデズ氏ゴットハ歐羅巴ノ北部ヲ指シテ之ヲ
人種ノ鍛鍊場ト稱セシモ予ハ之ヲ目シテ南人ノ桎
梏ヲ破壊スル器械ヲ鍛鍊スル工場ト爲サント欲ス、
何ソヤ曰ク歐洲北部ノ人民ハ一タビ其國ヲ出テ、ヨ
リ到ル所口虐主ヲ掃蕩シ奴隸ヲ解放スルノミナラ
ス、宇内ノ生靈ヲンテ凡ソ人タル者ハ皆ナ同等ノ天
爵ヲ得テ生スルモノナレハ、決シテ他人ニ隸従スル
ノ理無ク其間ニ主従ノ別ヲ設クルハ特リ自己ノ康
福ヲ濟スニ外ナラサルヲ知ラシメシヲ以テナリ

第六回

亞細亞ノ奴隸制ト歐羅巴ノ自由權トハ俱ニ土地ノ形勢ニ因ルヲ論ス

亞細亞諸國ノ其版圖常ニ歐羅巴ヨリ廣大ナルハ蓋シ亞細亞ハ曠漠タル平原ニ富ムノ故ヲ以テ山海ノ脈派ニ分割セラレテ一邦域ヲ成ス。歐羅巴ニ於ルヨリモ更ニ廣大ナルト及ヒ其地位、歐羅巴ヨリモ更ニ南極ニ接近スルカ故ニ山岳ニ積雪ナク水流涸レ易ク大河長江ノ天然ノ分界タルモノ甚々數キニ由テナリ

故ニ國ヲ亞細亞ニ建立スル者ハ專制ノ政ヲ以テ人

民ヲ奴役スルニ非レハ決シテ此廣大ノ土地ヲ統轄シ能ハス假令之ヲ割キテ數個ノ邦國ニ分ツモ其地勢ニ適當セサレハ終ニ其治ヲ爲ス能ハス之ニ反シテ歐羅巴ノ地勢ハ天然ノ分界極メテ多キニ因リ若シ精確ノ憲法ヲ立テ以テ其國ヲ維持スルキハ全洲ヲ分割ノ數多ノ邦國ヲ建設スルモ決シテ他國ニ兼併セラル、ノ患ナカル可シ是レ歐羅巴諸國ノ概子法律ニ憑依シテ專制ノ政鮮キ所以ナリ法律ノ作用ト貿易ノ利益ニ依ラス腕力ヲ以テ歐羅巴ノ各部ヲ壓制セント欲スルハ萬モ爲ス可ラサル所ニシテ夫ノ人民ノ常ニ自由ノ氣質ヲ失墜セサル

モ洵トニ茲ニ胚胎スルモノナリ

亞細亞ノ大勢ヲ觀ルニ其人民常ニ奴隸ノ氣質ヲ脱スル能ハス故ニ古今ノ史乘ヲ涉獵スルモノ自由ノ精神ヲ抖擻シタル文章アルヲナク唯隸從ノ度ヲ過キテ及フ可カラサルモノ、讀者ノ心目ヲ駭カスアルノミ

第七回 亞弗利加及ヒ亞米利加ノ二大洲ヲ論ス

亞細亞、歐羅巴二洲ノ民ノ其氣質ヲ同クセサルヤ斯ノ如シ而シテ阿弗利加ハ其氣候恰モ亞細亞ニ異ラサルヲ以テ其人民ノ奴隸心ヲ帶フルヲ亦タ異ル所

ナシ、亞米利加ニ至テハ其土人ハ歐人ノ爲ノニ珍藏セラレ之ニ阿弗利加人ヲ移植シテ新國ヲ建立セルモノナルカ故ニ今日敢テ其人民ノ氣質ニ確評ヲ下シ難シト雖モ其舊史ニ據テ之ヲ追想スルハ亦タ敢テ予カ論理ニ戾ルヲ無シ西班牙人ハ米洲土蕃ノ部ヲ呼テ勇武印度ト稱シタル又ソノ墨即白露ノ二帝國ヲ征服スルニハ非常ノ艱難ヲ經過セリト

第八回 大國ノ都城ヲ論ス

今前文ノ論理ニ據テ其結局ヲ究ムルニ凡ソ大國ノ君主ハ其都城ヲ經營スルニ先ツ其地勢ノ要害ヲ擇マサル可カラス約シテ之ヲ言フニ京都ヲ南方ニ建ツル者ハ常ニ北地ヲ失フノ患ヲ免レサルモ、禹ヲ北

方ニ定ムルモノハ、南面シテ上國ヲ控制スルノ頗ル
容易ナリ然レモ是レ特ニ其大勢ヲ舉クルモノニシ
テ要スルニ能ク其時勢ノ如何ニ適スルニ在ルノミ、
見ヨ夫ノ機械ノ所謂摩擦ナルモノ、時トミテ理學
上ノ規則ト實際上ノ運用ニ齟齬ヲ生スルヲ、政治
ニ於テモ又爾カ云サルヲ得サルナリ

萬法精理卷之十七畢

萬法精理卷之十八

何禮之譯

土質ニ關涉スル法律ヲ論ス

第一回 土質ノ法律ニ影響ヲ生スルノ論

土質ノ甚タ美ナルハ其民ニ隸從ノ風ヲ成サシム可
レ是レ沃地ノ民ハ大抵耕種ニ從事スルヨリ一家ノ
私務甚タ多忙ニシテ敢テ自由權ニ熱中スルノ暇ナ
ク又其國富饒ヲ極ムルニ從テ外敵ノ掠奪ヲ恐レ兵
事ヲ忌マサルヲ得サルニ由ルモノナリ故ニ此セロ
一、アチクスニ謂ツテ曰ク此良社會ヲ成スモノハ誰
レリ、其民ハ貿易ヲ營ムモノ耶、將タ耕種ヲ勤ムルモ

ノ耶、此輩ヲ以テ立君政ヲ忌ミ惡メルモノト想像ス
可ラス、此輩ハ苟モ平安無事ナルヲ得ルハ即チ満
足シテ政體ノ良否ヲ問ハサルモノナリト
是レ乃チ立君政ノ必ス沃地ニ行ハレ、共和政ノ常ニ
瘠土ニ多キ所以ニシテ夫ノ共和政ノ人民ノ莫大ナ
ル自由ヲ占得スルハ以テ其土質ノ磽确ナルニ苦シ
ム所ノ報酬ナルモノナリ

然ルニアツク部落ノ瘠地ニハ民主政ヲ設立シ、而シ
テラセトシノ沃土ニ貴顯政ヲ建置セシハ蓋シ當時
希臘ノ民情一君ノ政府ヲ悦ハサリシト雖モ隸從ノ
風其俗ヲ成スニ依リ立君政ニ類似スルノ最モ近キ

貴顯政ヲ建置セシモノナリ

プルタルキ曰ク雅典人ハシロニヤンノ騷亂ヲ平定セ
シ以來民心分裂シテ各其割據セル地理ニ從テ黨派
ヲ樹テ、高原ノ民ハ民主政ニ熱心シ、平野ノ民ハ首領
ヲ戴クヘキ政府ヲ欲シ、海濱ノ民ハ此二者ヲ合併シ
タル政體ヲ希冀シテ再ヒ昔時ノ頽勢ニ却退セリ

第二回 同上

殷富ナル州郡ハ概チ沃饒ノ平野ニ在テ天險ノ要害
ニ乏シ故ニ其住民常ニ敵人ノ來寇ニ抵抗シ能ハス
終始强者ニ隸從セサルヲ得ス抑モ人民節ヲ屈シ
テ一タヒ獨立ノ氣象ヲ失スルハ自由ノ元氣忽チ

渙散シテ其挽回ヲ期ス可ラサルモノナレバ一國ノ
富ハ適强者ニ對シテ順從無二ノ心ヲ渝ヘサルノ保
證タルニ過キサルナリ之ニ反シテ山嶽ノ民ノ常ニ
其守固クシテ自由ヲ失セサル所以ハ土地極メテ磽
确ニシテ貨財甚タ多ラサルニ依リ即チソノ平素享
用スル所ノ自由(即チ其戴ク所ノ政體)ヲ以テ直ニ力
ヲ防禦ニ盡スノ良酬ト為スニ出ルモノナリ嗚呼自
由ノ磽确軟軻ヲ極ムル瘠土ニ流行スルヲ夫ノ天時
地利ヲ得タル沃壤ニ於ルヨリ更ニ熾盛ナルハ豈理
ノ當ニ然ルヘキ所ロナラスヤ

山國ノ民ハ天險ノ地ニ據リ防禦ノ術ニ便ナルヨリ

敵兵其彈藥糧草ヲ我レニ仰ク可ラス必ス巨費ヲ用
平テ之ヲ搬運セサル可ラス況ンヤ之ト戰フニ其鋒
極メテ劇烈ニ其策極メテ危險ナラサルヲ得ス又ソ
ノ人民ノ安全ヲ謀リテ制定スヘキ法律モ一トシテ
其作用アラサルニ於テヲヤ是レ山國ヲ攻ムルノ甚
タ難事ニシテ其住民ノ能ク寛和ノ政府ヲ保持スル
所以ナリ

第三回 稼穡ノ道最モ開ケタルハ果シテ何

國ニ在ルヤノ論

夫レ稼穡ノ道ノ開ケルト否ラサルトハ唯タ人民ノ
自由ヲ得ルト得サルトニ在リテ敢テ國土ノ肥瘠ニ

因ルニアラサルナリ試ニ讀者ノ想像ヲ以テ球上ノ大陸ヲ區劃シ古今ノ成迹ヲ觀察セヨ、必ス荒廢無人ノ野ヲ土質肥沃ノ地ニ認メ天時地利兩ナカラ相應セサル所ニ富強ノ國民アルヲ看出ス可シ亦一奇ト謂サルヲ得ス

人民ノ惡地ヲ去テ良土ニ趨クハ固ヨリ自然ノ勢ニシテ未タ良土ヲ捨テ、惡地ニ就クモノアルヲ見サルナリ故ニ外寇ノ侵襲ハ概シテ之ヲ天恵ヲ得タル樂國ニ見ルヲ多クシテ從テ其劫掠ノ禍ヲ蒙ムル實ニ他ノ國土ヨリ甚シキモノアリ蓋シ外寇ノ患ト劫掠ノ禍トハ互ニ結合シテ相離レサルヨリ肥沃ナル

地方ハ屢此二者ノ災ヲ蒙マリ人民寧處スルニ暇ナク烟戸繁殖スルニ由ナシ然ルニ北部ノ諸國ハ殆ント人類ノ生息ニ適セサルカ如キヲ以テ却テ人民安泰ナルヲ得タリ

古史ニ曾テスカンデナフキヤ人カ多惱河流ニ沿フテ遠征セシヲ記セリ今之ヲ追考スルニ敢テ敵國ヲ征畧スルカ爲メニアラス唯タ一ノ空地ヲ求メテ部落ノ遷徙ヲ爲セシモノナリ

其初メ多惱河邊ノ樂土ニ住セル人民ハ如何ナル外寇ニ遭ヒ如何ナル慘禍ヲ蒙マリシヤ得テ知ル可ラスト雖モ必スカンデナフキヤ人ノ部落ヲ遷徙セシ

二先チテ他ノ人種ニ蹂躪セラレ人民漸々四散シ終
二一國ヲ墟ニシタルナル可シ

アリストートル曰ク「古蹟ノ存スルニ據テ之ヲ考フ
ルニ撒丁島ハ原ト希臘ノ殖民地ニ属シ土地肥饒人
民殷富ニシテ而モ其法制ハ夫ノ勸農ノ美名ヲ天下
ニ著シタルアリステユスノ手ニ成リ大ニ其國勢ノ
觀ル可キモノアリシモカルタージニ臣服シテ以來
苟モ人類ノ滋養トナルヘキ物産ハ皆ナ其残害スル
所ト爲リ死刑ヲ以テ人民ノ耒鋤ヲ執ルヲ嚴禁セシ
ニ因テ遂ニ其人民日ニ衰頹ニ赴ケリト撒丁ノ如キ
ハ已ニアリストートルノ世ニ在テ舊時ノ富強ニ復

シ能ハサルノミナラス今日ニ至テ尚ホ其起色アル
ヲ見サルナリ憫ム可キカナ

百兒社、土耳其、魯西亞及ヒ波蘭ノ中ニ於テモ其温暖
ナル地方ノ如キハ昔日韃靼ニ騷擾サレタル瘡痕ノ
今日ニ至テ未タ全ク平癒ヲ得能ハサルモノアリ

第四回 新タニ邦土ノ肥墾ヨリ生スル所ノ

效果

墾地ノ民ハ全ク其勞力ニ賴リ以テ其土地ノ自然ニ
生セサル所ノモノヲ種藝收穫セサルヲ得ス故ニ其
性老實ニシテ工業ニ勤勵シ勇敢ニシテ艱難ニ畏縮
セズ之ヲ驅テ以テ戰鬪ニ從事セシム可キナリ之ニ

反シテ土地ノ肥沃ナルハ其民ヲシテ安逸柔懦唯々其性命是レ惜シムノ心情ヲ起サシムルモノナリ今一例ヲ舉ニニ日耳曼ノ兵士ノ薩索尼ノ如キ富饒ナル地方ヨリ召募シ来ル者ハ他ノ州郡ノモノヨリ大ニ怯劣ナリト云フ斯ノ如キハ其軍律ヲ嚴ニシ訓練ヲ精シクシテ以テ之ヲ醫治スヘキナリ

第五回 嶋嶼ノ住民ヲ論ス

海其國ヲ環ル所ノ人民ハ大陸ニ住メル者ヨリモ自由ノ滋味ヲ咀嚼スル一層濃厚ナリトス蓋シ島嶼ハ概シテ方域廣大ナラサルニ由リ執政者甲部ノ民ヲ使役シテ以テ乙部ノ人ヲ壓制スルニ容易ナラス

加フルニ海水ヲ以テ自ラ劃ルカ故ニ直チニ壤ヲ大國ニ接スル一無ク〔越外患鮮〕又其邦域狹隘ニシテ大ニ暴政ヲ逞ウスルニ足ラス〔越内憂ノ鮮〕殊ニ波濤ノ天險アリ以テ英雄〔越〕大陸ノ偉圖ヲ阻ム可キヲ以テ英雄ノ腕力ニ屈從スル一常ニ稀レニシテ其固有ノ法律ヲ保チ得可シ

第六回 人ノ勤勞ヲ以テ經營シタル土地ヲ論ス

全ク人ノ勤勞ニ資リ沮洳ヲ填メテ以テ人民ノ棲息スル所ト為シ之ニ次クニ連々經營ノ功ヲ以テセサレハ將來饑饉ノ患無キ能ハサル邦土ノ如キハ政體

寛和ニシテ而シテ後チ始テ以テ其治ヲ為ス可シ支
那全邦ノ時賦ニ甲タル江南、浙江ノ二省及ヒ埃及、荷
蘭即チ其尤ナルモノナリ

支那古代ノ諸帝ハ兵力ニ頼テ人民ヲ制御セズ唯々
其智德ノ光被スルヲ以テ天下ニ君タルノ尊榮ト者
做セリ故ニ大ニカヲ水利ニ竭シ鹵澤ヲ變シテ沃土
ト爲シソノ江南、浙江二省ノ如キハ其初メ全ク水流
ノ滙凝セル所ニ過キサリシモ今日歐人此二省ノ肥
沃ナルヲ觀テ概シテ支那帝國ノ豐饒ヲ羨マサルモ
ノナキニ至レリ而シテ此新開ノ土地ヲ保護シ絶エ
テ汎濫潰決ノ害ナカラシメント欲スルニハ君主專

暴ノ政ヲ行ハス法律ニ則リテ其治ヲ敷キ百姓ヲシ
テ勤勞ヲ厭ハス逸樂ヲ好マサルノ風俗ニ移易セシ
ムルニ非サレハ能ハサルヲ以テ支那帝國ノ政ハ往
古ノ埃及、今日ノ和蘭ニ於ルカ如ク其勢恒ニ寛和ナ
ラサルヲ得ス是レ造化主ノ人類ヲシテ自ラ其土地
ヲ經營シ敢テ自棄自暴ニ付セシメサル所以ナリ
其風土ハ自ラ民心ヲ誘掖シテ卑屈隸從ニ陥ラシム
ルノ惡因アルト其封域ハ廣大ニ過キテ暴虐ノ政ニ
傾クノ憂患アルトニ拘ラス支那ニ於テ上古聖人出
テ、金科玉條トモ稱スヘキ法律ヲ制定シ以テ後ノ
政柄ヲ執ル者ヲシテ之ニ遵依シテ敢テ違ハサラン

メシハ全ク此理由ノ外ニ出テサルヘシ

第七回 人ノ勤勞ヲ論ス

人類ハ其勤勞ノカト良法律ノ作用ニ賴リ、地球ヲ脩治シテ已レノ棲息スルニ一層適當ナラシムルモノナリ、見スヤ、昔時ノ湖沼モ今日疏通シテ便利ノ河流ト變セシヲ、此等ノ便益ハ造化ヨリ直ニ人ニ賜フモノニアラス、必ス人類ノ經營ヲ須テ而シテ後々始テ之ヲ得ルモノナリ○曾テ百兒西人カ亞細亞ヲ占領セシ時ニ方テ一法ヲ制定シテ凡ソ從來灌漑ノ便ヲ缺キタル地方ニ泉流ヲ通スルモノハ其人ニ許スニ五世ノ間其便利ヲ占用セシムルヲ以テセシカ

幸ニタウルス山ヨリ出ル所ノ細流數條アリシニ依リ人民巨費ヲ惜マス之ヲ各所ニ疏導セリ故ニ今日畝園圃ヲ論セス到ル處溝渠ノ通セサル無ク灌漑ノ徧ヲサルナク其廣大ノ利澤ニ浴シテ却テソノ流出スル本源ヲ知ラサルモノアリ

殺伐ナル國民ノ損害ハ數世ニ亘リテ尚ホ其痕跡ヲ掩フ可ラス勤勞ナル人民ノ工業ハ其形骸已ニ腐化スルモ其利澤ハ悠久ニ傳ハリテ朽盡セサルヲ斯ノ如シ

第八回 法律ノ權衡ヲ論ス

法律ハ其國民ノ營生スル方法ニ從テ之カ差異ヲ生

スルモノナリ乃チ通商ヲ專業トスル國民ノ法制ハ
必ス耕種ニ從事スルモノヨリモ一層繁縟ニシテ耕
種ニ從事スルモノ、法制ハ游牧ノ民ヨリ更ニ繁縟
ナラサル可カラス而シテ游牧ノ民ノ狩獵ノ民ニ於
ケルモ亦然ラサルハナシ

第九回 亞米利加洲ノ土壤ヲ論ス

亞米利加洲ニ斯ク野蠻人種ノ繁殖セル原因ハ其土
質極メテ肥沃ナルニ因テ野生ノ果實ハ其力ヲ勞セ
サルモ饑餓ヲ充タスアルノミナラス蕃婦偶其廬傍
ニ一犁ノ鋤ヲ下ス時ハ忽チ蜀黍滿畦ノ豐熟ヲ獲ヘ
ク況ヤ反芻ノ獸類ノ能ク人ノ用ニ供スヘキモノ水

陸ニ充羽ニ更ニ亞弗利加ニ於ルカ如ク兇猛ノ獸類
多ラサルニ因テ男子ハ常ニ狩獵ヲ以テ生計ノ裕饒
ヲ致ス可キニ於テヤ

之ニ反ミテ歐羅巴ノ土地ハ松柏ノ森林ヲ除ク外其
生殖スル所ノ物産極メテ寥々ナルヲ以テ懇口ニ耕
耘ノ力ヲ施サ、レハ決シテ收穫ヲ望ム可ラサルナ
リ

第十回 人口ノ増減ハ營生ノ方法ニ關涉ス

ルヲ論ス

試ニ眼ヲ放テ農業ニ從事セル邦國ノ人民ト之ニ從
事セサルモノト、比例ヲ見ヨ、荒蕪ノ土地ハ豐饒ノ

田畝ニ對シ、野蠻ノ口數ハ農夫ノ口數ニ對スルヲ知
ル可シ而シテ農事ヲ務ムル民ハ亦タ兼テ工藝ヲモ
簡ムルヲ以テ益之ヲ比較スルニ從テ其相距ル度數
ノ益遠キヲ見ル可キナリ

游牧ノ民ハ廣大ナル土地ヲ占領スルモ僅カニ一部
落ノ需要ヲ充タスニ過キス狩獵ノ民ニ至テハ更ニ
廣大ナル土地ヲ得サレハ以テソノ饑寒ニ迫ルヲ免
シ難シ是レ上地廣大ナルモ未タ農ヲ務メサル人民
ニシテ能ク一大社會ヲ成スモノ無キ所以ナリ
未開ノ國ハ常ニ薊薊タル森林ニ富ミテ而モ疏水ノ
術ヲ知ラサルヨリ流水ノ滙シテ瀆澤ヲ為スモノ甚

タ多キ力故ニ諸部落ノ屯集スル所ハ大抵林ニ據リ
澤ヲ控シテ各自ニ一小社會ヲ成セリ

第十一回 野蠻ノ部落ヲ論ス

未開ノ人民ニ二類アリ其一ヲ游牧ノ民ト云ヒ其二
ヲ狩獵ノ民ト云フ、游牧ノ民ハ常ニ集合シテ一部落
ヲ成シ得ヘシト雖モ狩獵ノ民ハ各族四散セサレハ
生計ノ道ヲ求ム可ラサルヲ以テ始終一小社會ヲモ
成シ能ハサルナリ

此游牧ノ民ト狩獵ノ民ノ相同シカラサル實相ハ之
ヲ亞細亞ノ北部ニ於テ見ル可キナリ夫レ西伯里ノ
民ハ其衣食ノ源ヲ野獸ニ資ラサルヲ得サルカ故ニ若

シ集リテ一社會ヲ成ス片ハ忽チ生活ノ道ニ窮シテ
饑寒ヲ免レサルモ韃靼人ハ其牲畜ヲ率ヒテ諸族相
集合スルモ俄カニ窮乏ニ至ラサルヲ以テ常ニ一小
國ノ形勢ヲ存セリ而シテ斯ク諸族ノ相集合スルハ
殊ニ其一族中ニ雄長崛起シ、自餘ノ諸族ヲ降伏セシ
ムルノキニ在リ既ニ集合シタル後ハ各族水草ヲ逐
フテ離散スルヲ其初メノ如クナルカ或ハ一團ト為
リテ南方ノ帝國ニ入寇スルカ決シテ此二策ノ外ニ
出テサルナリ

第十二回

農ヲ務メサル國民ノ公法ヲ論ス

〔按〕此公法ト稱スルモノハ今日ノ
所謂萬國公法ニ非スシテ強ハ弱

ノ食ニ敵人ニ克テハ之ヲ奴隸ニ
スル等ノ權利ヲ指スモノナリ
土地ヲ耕サ、ル人民ハ疆域ヲ劃リテ相居住セサル
カ故ニ彼此ノ間互ニ其荒蕪地ヲ争フヲ恰モ我カ開
化人民ノ所有ニ屬セル家産ニ於ルニ異ラス而シテ
其爭論相決セサルヨリ終ニ腕力ヲ以テ相鬪フニ至
ル其原由大抵ハ漁獵セル山水ニ起リ、或ハ牛羊ノ牧
場ニ起リ、或ハ其奴隸ヲ掠奪スルニ生セリ然レモ彼
此齊シク不動産ヲ所有セサルカ故ニ公法ニ據テ判
決スルモノ居多ニシテ民法ヲ以テスルモノ蓋シ甚
タ鮮ナシトス

第十三回

農ヲ務メサル國民ノ民法ヲ論ス

民法ハ專ラ土地ヲ分賦スルニ因テ増加スルモノナ
リ私有ノ土地アラサルカ如キ國民ハ人爲ノ法典ヲ
有スルヲ甚タ稀レナルモノナリ

故ニ私有地ヲ得サル人民ノ制度ハ之ニ法律ノ稱ヲ
下サンヨリ寧ロ風習ノ名ヲ下スヲ以テ更ニ適當ナ
リトス

斯ル國民ノ中ニテ權柄ヲ執ルモノハ能ク往事故例
ヲ記憶スル所ノ耆老ニ屬シ衆望ヲ繫ク者ハ全ク智
勇ノ二事ニ在リテ富財ノ如キハ絶エテ之ニ與ル
ヲ得ス

抑モ狩獵游牧ノ民ハ水草ヲ逐フテ遷移シ或ハ牧場

ニ在リ或ハ山林ニ棲ミテ以テ其生計ヲ營ムカ故ニ
婚姻ノ制アルモ我カ開化人民ノ如ク夫妻一處ニ定
居シ能ハス又男子ハ其妻ヲ換エ或ハ數婦ヲ擁シ或
ハ之ヲ獸視スル風俗アルヲ以テ婚姻ノ制ハ以テ婦
女終身ノ安固ヲ賴ムニ足ラサルナリ

且斯ノ國民ハ牲畜ヲ以テ已カ性命ヲ繫クノ源ト看
做スヲ以テ之ヲ看護スル所ノ妻女ト俱ニ必ス之ヲ
其身ニ跟隨セシメサルヲ得ス故ニ天然ノ要害ニ乏
シキ荒漠ノ原野ニ居ル時ハ往々其妻子牲畜ヲ以
テ強敵ノ肉餌タラシムルヲ免レサル可シ
斯ル國民ノ法律ハ擄物ノ分賦ヲ調整スルカ如キリ

極々テ盜賊ノ事ニ精密ナルハ猶ホ我カ「サリッ」ノ法律ニ毫モ異ル所無シ

第十四回 農ヲ務メサル國民ノ政權ヲ論ス
斯ノ國民ノ受用スル自由ハ殆ト際涯ナシト謂フモ決シテ過言ニアラス、土地ヲ耕サ、ルニ因テ遷移常ナク居所定ラス若シ酋長ノ爲メニ偶其自由ヲ剥奪サル、^{「ア」}アルニ遭^{「キ」}ハ飄然忽チ去テ他ノ酋長ニ隸從シ或ハ家族ヲ携ヘテ深山ニ隱棲ス可キカ故ニ進退去就一トシテ其欲スル所ニ任セサルハ無シ其性法上ノ自由ノ著大ナル遂ニ以テ政事上ノ自由ヲ助長スルノ元行ト為ルニ至レリ

第十五回 貨幣ノ用ヲ知ル人民ヲ論ス

アリスマチピュスナル者アリ破船ノ難ニ遇ヒ波濤ヲ游泳シテ幸ニ一處ノ濱岸ニ着セシ時其沙上ニ數字ノ印迹アルヲ見テ忽チ其心ニ此地ハ希臘人ニ屬シテ野蠻ノ巢窟ニアラサル^{「フ」}ヲ料知シ實ニ其喜ニ堪ハサリ^{「ト」}ト云フ

故ニ人偶不測ノ災ニ罹リテ異邦ニ漂流スル^{「ア」}アラニニ若シ一片ノ貨幣ヲ見ル^{「フ」}ヲ得ハ乃チ其胸裏ニ此地ノ住民ハ果シテ開明ノ域ニ達セル者ト自ラ信シテ疑フ可ラサルナリ

農業開ケテ乃チ貨幣ノ用ヲ生シ從テ技術ヲ發明シ

從テ智識ヲ増進ス而シテ人民ノ智識ト技藝工術及
ヒ貨物ノ要スルノ心情ト常ニ並ヒテ前進セサル無
キハ此三者ハ蓋シ品價ヲ標記スル所ノ關鍵タルヲ
以テリ

洪水地震ノ天變ニ依リテ地心ニ胎藏スル所ノ金屬
ヲ省出スヲアリ若シ一タヒ之ヲ分析スルヲ得ハ其
主要ノ用ニ充ツルヲ甚タ難キニアラサル可シ

第十六回 貨幣ノ用ヲ知ラサル人民ノ民法

ヲ論ス

人民未タ貨幣ノ用ヲ知ラサル時ニ在テハ偶冤枉ヲ
被ルアルモ畢竟強暴ノ外ニ出ルヲ甚タ稀シナリ

故ニ弱者相集リ、カヲ協セ心ヲ一ニシ以テ防禦ノ策
ヲ立テ、以テ避害ノ法ヲ設ク可キニ依リ其國ノ法律
ハ唯タ政治ノ規則ニ過キサシモ敢テ足ラサル一無
シト雖モ、一タヒ貨幣ノ用法ヲ知ルヤ否ヤ欺詐駭騙
百出窮リ無ク、復タ曩日強暴一途ノ比ニアラサルヲ
以テ人情ノ狡黠ニ趨クニ從テ善良ナル民法ヲ制定
セサル可ラサルナリ

貨幣ヲ用フサルノ邦國ニ於テハ盜賊ノ攘奪スル所
ハ尋常ノ動産ニ止リ他ニ類似ノ品少キヲ以テ其賊其
身ニ從ヒ踪跡ヲ掩フヲ容易ナラスト雖モ一タヒ貨
幣ヲ用ウルニ至テハソノ彼此相類シテ之ヲ辯識ス

ルニ由シ無キヨリ遂ニ(類ノ少キ)物品ヲ攘奪セスニ
テ専ラ(類ノ多キ)リノ標記タル貨幣ヲ攘奪スルニ至
ルモノナリ

第十七回 貨幣ノ用ヲ知ラサル人民ノ政法

ヲ論ス

農ヲ務メサル人民ノ自由ノ鞏固穩泰ナルハ蓋シ未
タ貨幣ノ用ヲ知ラサルニ在リト謂ハサルヲ得ス何
トナレハ狩漁ノ獲物牧畜ノ牛羊ノ如キハ得テ多ク
貯藏ス可ラサルカ故ニ一人非常ノ富ヲ有テ之ニ依
リテ餘人ヲ利誘シ其操守ヲ破ラシハルヲ能ハサル
モ已ニ貨幣ノ通用アルニ至レハ一人ニシテ其富ノ

標記ヲ所有シ其所欲ニ任シテ之ヲ揮霍シ以テ人心
ヲ籠絡シ得ルヲ以テナリ

貨幣アラサルノ人民ハ其需要ノ物件亦甚々歎ナシ
假令稀ニ需要スル所アルモ容易ニ之ヲ充タシ得テ
而モ厚薄懸隔ノ弊ナシ於是同等ノ理自ラ其間ニ生
セサルヲ得ス是レ其酋長獨リ權威ヲ專ニスル能ハ
サル所以ナリ

若シ行客ノ言ヲ實ナリトセハルイジヤナリニ住メ
ルナツテ部落ノ政體ハ全ク前文ニ相反セルモノ、
如シ此部落ノ酋長ハ一己ノ喜怒ニ任シテ部下ノ財
産ヲ與奪シ或ハ工役ヲ吩咐スル其權毫モ土耳其ノ

國帝ニ遜ラス部下ノ民ハ唯タトシテ其命令ニ依從
シ頭腦ノモ辞スルヲ得ス且若シ酋長ニ繼嗣誕生
スルキハ當時部下ノ乳哺セル子女ヲ舉ゲテ終身其
使役ニ服事ス可キ誓言ヲ要スル恰モ上古埃及帝王
ノ紀傳ヲ讀ムカ如シ又茅茨土階ノ上ニ在テ威儀ノ
嚴重ナルハ殆ント支那日本ノ帝王ニ髣髴タリ

第十八回 法教ニ執迷スルノ人心ヲ論ス

人心ヲ感動シテ其勢ヒ最モ猛烈ナルハ未タ執迷心
ノ頑固ナルヨリ甚シキモノ非サルナリ故ニ野蠻ノ
人民ハ固ヨリ未タ暴政ノ何物タルヲ識得セスト雖
モ已ニ其猛烈ノ畏懼スヘキヲ感覺シテ常ニ太陽ヲ

禮拜スルニ依リ其酋長タル者其身ハ此光明陽ノ兄
第タリト自信スルニ非サレハ決レテ部下人民ノ隷
從ヲ繫クヲ能ハスト云フ

第十九回 亞喇比人ノ自由ト韃靼人ノ隷從

トヲ併セ論ス

亞喇比、韃靼ノ人種ハ齊シク游牧ノ民ナリト雖モ亞
喇比人ハ已ニ自由ノ地歩ヲ占メ、韃靼人(球上最奇ノ
人民)ハ猶ホ政事上ノ奴隸ト為レリ可汗即位ノ禮ヲ
行フキハ人民皆
ナ其言ハ劔ノ如クソノ然ル所以ハ已ニ第十七卷ニ
於テ之ヲ論セシモ復タ茲ニ其他ノ理由ヲ申述スベ
シ

抑モ韃靼人ハ居ニ城邑ナク野ニ森林ナシ加フルニ
湖澤甚タ僅少ニシテ江河ハ常ニ氷結シ其棲息スル
所ハ廣漠タル平原ノ以テ牲畜ヲ牧飼スヘキヲ所有ス
故ニ全ク財産無シト謂フ可ラス然レ氏退キテ守ル
ヘキ險要ノ地ナキヲ以テ可汗一タヒ戰ニ敗ル、片
ハ頭足忽チ其處ヲ異ニシ而シテ闔族ノ血ハ沙上ニ
塗リマホメトカイスパ、ニヲ擒ニセシ氏、都部下ノ
テ其親王ヲ殺セシト即チ其例ナリ臣民ハ敵人ノ虜奴ト成
ラサルヲ得ス然レ氏得勝者
亦来鋤ヲ容ル、ノ隴畝ヲ有セス家中ノ服役ヲモ要
セサレハ若シ此俘虜ヲ將テ民事上ノ奴隸ト為ス氏
ハ却テ樸素ナル人民勝ノ苦累タルニ過キサルカ故

ニ之ヲ國民ノ員中ニ加ヘテ以テ政事上ノ服役ヲ務
メシム是レ韃靼人ニ民事ノ奴隸ナキ所以ナリ
部落相分レテ戰鬪ヲ事トシ一仆一起更ニ統一ノ期
ナク又一部落ノ酋長死亡スル氏ハ併セテ其社會モ
滅絶スル處ノ國民ノ如キハ終始其獨立ヲ保チテ他
ノ部落ニ隸從セサル者アラサルカ故ニ概シテソノ
自由ヲ受用スルヲ甚タ鮮シトス
險要ニ據リ一戰ノ後其力足ラスシテ降ル處ノ人民
ハ稍其自由ヲ保存ス可シト雖モ韃靼人ノ如キハ常
ニ保守スヘキ要害ヲ得サルカ故ニ一タヒ征服サル
、キハ絶ヘテ得勝者ニ何等ノ約束ヲモ望ムヲ能ハ

サルナリ

未鋤ヲ加ヘタル平原ニ住ム人民ノ自由ヲ得ルヲ蓋
ニ歎シトハ第二回之ヲ論セシ如クナリシカ韃靼人
ノ如キ未開ノ平原ニ住ムモノト雖モ亦ソノ自由ヲ
受用シ能ハサルノ事情アル斯ノ如シ

第二十回 韃靼人ノ實踐セル公法ヲ論ス

韃靼人ハ同族ヲ視ルニ頗ル寛仁ナルカ如シト雖モ
自餘ノ人民ヲ征服スルニ方テ其殘酷甚タシク城邑
ヲ陷ルレハ直チニ其居民ヲ擧ゲテ之ヲ屠殺スルニ
至ル若シ其性命ヲ存シテ其身ヲ掠賣シ或ハ兵士ニ
給シテ奴隸ト為スヲアレハ則チ之ヲ以テ仁慈ノ道

ヲ盡セシモノト思想セリ故ニ曾テ其大舉入寇セシ
キニ方テ其經過スル所印度ヨリ地中海ニ至ル迄悉
ク兵火ノ災ニ罹リ百見西以東ノ地方ハ全ク灰燼ノ
墟ト為レリ

顧フニ此公法ハ城邑ヲ有セサル人民ノ最モ猛烈ナ
ル戰鬪ヲ為スニ因テ然ルモノニシテ若シ捷ヲ得ル
ノ希望アレハ則チ敵人ト戰鬪シ其望ヲ失スレハ則
チ強者ニ合從スルノ習俗ナルカ故ニ政兵ヲ擊退ス
ルニ足ラサルノ城邑ヲ以テ其進路ヲ遮斷スルハ全
ク公法ニ悖戾スルモノト着做シ且城邑ヲ着テ住民
ノ聚居スル所トセス唯タ其兵威ニ抗敵スル處ナリ

ト思惟シ又之ヲ攻圍スルニ技術ヲ用ヒス互ニ肉薄
ミテ相戰フヨリ我カ兵ノ死傷スルモノ亦甚タ多キ
ヲ以テ一旦城陷ルニ及ニテ報復ノ念從テ劇烈ニシ
テ遂ニ之ヲ屠ラサレハ其怨ヲ霽スニ足ラサルニ淵
源スルナルヘシ

第二十一回 韃靼人ノ民法

宣教師ドエ、ヘーランド曰ク韃靼人ハ常ニ季子ニ其財
産ヲ紹續セシムト蓋シ伯仲ハ其年齡已ニ長シテ父
ノ未タ死セサルニ先キ其分與セル牲畜ヲ率ヒテ新
タニ一家ヲ構成スレハ父ノ家ニ留リテ其遺産ヲ得
ヘキハ獨リ季子ニ限レルヲ以テナリ

英國ノ部内ニ於テモ亦タ此慣習ノ存スル處アリト
聞ケリ現ニ我カブリタニニ於テモ其流行スルヲ
目撃セリ顧フニ其住民他方ヨリ游牧ノ民ノ法律ヲ
借り來リテ因循今日ニ至ルモノナルカ或ハ日耳曼
人ノ此地ニ設立セシモノニ由ルカ必ス二者ノ一ニ
屬スルナル可シ、シーガル、タヒトスノ著書ニ據ハ此
地ノ人民ハ耕種ニ從事スルヲ甚タ寡シト云ヘリ

第二十二回 日耳曼人ノ民法

日耳曼人ノ民法按歐羅巴ノ北
部ニ起リタル
諸民ノ總稱ニシテ數多ノ部落
ノ聯合セルモノナリ其中佛國
ヲ征畧シテ其國ヲ建テ
シモノヲ佛朗機ト稱ス
茲ニ所謂サリクノ法律ト稱シテ土地ヲ耕サ、ル之

ヲ耕スモ極メテ歎キ人民ノ制度ヲ舉ケ而シテ其中ニ就テ數條ノ要領ヲ説明ス可シ其法律ニ云ク人死シテ子女アルキハ婦女ヲ捨テ男子ヲ以テ之カ繼嗣ト定ム可シ此法律ノ性質ヲ知ラント欲スルニハ先ツ佛朗機人カ未タ日耳曼ノ地方ヲ離レサルキニ於テ履行シタル土地ノ慣習風俗ヲ研究セサル可カラスエチヤルド氏ハサリクノ一語ヲ以テ「家ノ義」ヨリ訛傳シタルモノトセリ故ニ氏ノ說ニ從ヘハサリクノ土地トハ即チ「家ニ屬スル土地」ノ義ナリ予ハ更ニ一步ヲ進メテ其家ノ性質ト之ニ屬スル土地ノ性質

質トヲ考究セントス

タシトスノ著書ヲ見レハ日耳曼人ハ城邑ニ聚居スルヲ好マス各家扶疎トシテ諸方ニ散在シテ又彼此ヲ隔ルカ為メニ一塊ノ地ニ周圍ノ柵ヲ設ケテ其家ヲ環繞セリト當時ノ法律アリヤン人及ヒバニ屢命令ヲ下シテ此柵ヲ毀壞スルコトヲ禁止スル猶ホ人家ニ闌入スルヲ禁示スルニ異ラサルヲ見レハタシトスノ此一章ハ實ニ精密ナルモノト謂フヘキナリ

タシトス及ヒシーガルヲ讀ムニ日耳曼人ノ耕種セラル土地ハ一年ヲ限リテ其人ニ給與シ一年ノ後ハ舊

二復シテ再ヒ之ヲ人民ノ公有ニ歸セリトス故ニ男子ノ紹續ス可キ基業ニシテ其相傳ノ家産ト稱ス可キハ特リ住居セル家屋ト之ヲ環レル柵内一塊ノ地面ノミ宜ナル哉之ヲ我カ家ヲ忝リテ他人ニ嫁スヘキ女子ニ紹續セシメサルヲ
 此ニ據テ之ヲ見レハサリクノ土地トハ日耳曼人ノ住家ニ属セル柵内ニ有ルモノ、稱ニシテ固ヨリ其他ニ有チシ資産ニアラサルナリ然ルニ日耳曼ノ一部落タル佛朗機人カ他國ヲ征服スルニ及テモ尚當時ノ習俗ニ因循シ其略取シタル新地ニサリクノ稱呼ヲ下セリ

當初佛朗機人ノ日耳曼ニ居ルニ方テ其富財ト稱スルモノハ特リ奴隸牛馬兵仗ノ類ニシテ其住家及ヒ所屬ノ地面ハ舉ゲテ之ヲ將來其家ニ住居スヘキ男子ニ紹續セシメタリ其後他國ヲ征服シテ廣大ノ土地ヲ占領スルニ及テ女子及ヒ外孫ノ絶エテ父祖ノ産業ヲ紹續スヘキ權利ヲ有セサルヲ憫諒シ乃チ父祖ニ許スニ資産ノ一部ヲ割キテ以テ女子ト外孫トノ所有ト預定セシムルノ風習ヲ成シ此風習ニ循フモノ日ニ月ニ衆多ニシテ竟ニ舊時ノ法律ヲ弁髦トシニ至レルナリ讀者古ノ牒簿ノ存スルモノニ歷々其事ヲ登記セルヲ見テソノ然ルヲ知ル可シ

此牒簿中ヨリ復タ一ノ奇異ナル風習ヲ見出セリ即チ祖父ハ遺言ヲ以テ其孫ヲシテ子女ト齊シク遺産ヲ紹續セシムルヲ得ヘキ是レナリ、曰ク然ラハ則チ「カリク」法律ノ趣意ハ焉クニカ在ル、曰ク當時之ヲ遵行シ能ハサルノ事情アリテ然ルカ、或ハ女子ニ紹續ノ權ヲ與フヲ數ナリレヲ以テ終ニ其孫ニ之ヲ相續セシムルヲモ遂ニ認メテ慣習ノ默許スル所トナシタルニ在リレナル可シ

「カリク」法律ハ固ヨリ男ヲ贅ヒ女ヲ賤シム等ノ趣意アルニ非ス、況ヤ一族ノ名望ヲ不朽ニ傳ヘ所有ノ土地ヲ世襲シテ渝ラサル等ノ念慮アル可ケンヤ、當時

ノ日耳曼人ハ其頭腦ニ未タ曾テ斯ノ如キ思慮ヲ貯ヘサリシナリ蓋シ此法律ヲ制定セシ所以ハ全ク經濟上ニ出ル者ニシテ其家屋土地ヲ舉ケテ之ヲ後來爰ニ住居スヘク從テ最モソノ便益トナル可キ男女ニ讓與セルノ趣意ニ過キサルノミ茲ニ「カリク」法律中ヨリカノ論スル者多クシテ讀ム者ノ鮮キ私有地條規ノ著明ナルモノヲ寫出ス可シ即チ

第一條

人若シ子女ヲ生マスレテ死スルハ其父或ハ母ヲ以テ之カ相續人トナス可シ

第二條

若シ父母アラサルハ其兄弟姉妹ヲ以

テ相續人トナス可シ

第三條

若シ兄弟姉妹アラサルハ其母ノ姉妹ヲ以テ相續人トナス可シ

第四條

若シ母ノ姉妹アラサルハ其父ノ姉妹ヲ以テ相續人トナス可シ

第五條

若シ父ノ姉妹アラサルハ父族最近ノ親戚ヲ以テ相續人トナス可シ

第六條

サリク田ハ死後必ス之ヲ其子ニ傳フ可シ其一部ヲモ女子ニ紹續セシム可カラ

第一條ヨリ第五條ニ至ル迄ハ子女無キ人ノ紹續ヲ

定メ第六條ハ子女アル人ノ紹續ヲ定ムルモノナリ
子女無クシテ死スルハ特殊ノ場合ヲ除ク外法律ニ於テ曾テ男女先後ノ別ヲ制定セシヲ無シ即チ前文ノ紹續條規中第一條第二條ハ男女齊シク同一ノ權利ヲ有シ第三條第四條ハ女子ヲ先キニシ第五條ハ男子ヲ先ニセリ

タシトスハ此法律ノ偏頗ナル淵源ヲ論シテ、日耳曼人ノ其姉妹ノ子女ヲ親愛スルハ父ノ其子ニ於ルニ異ラス甚シキハ外甥ヲ視ルノ親情却テ其子女ニ超過シ、質ヲ受ルニ子ヲ返シテ甥ヲ取ル者アリト言ヘリ、我カ古史ニ佛朗機ノ諸王カ其姉妹及ヒ甥姪ヲ親

愛セルノ深篤ナルヲ極言スルモ全ク之ニ因由セ
シモノナル可シ且兄弟ノ家ニ在テ己ニ姉妹ノ子女
ヲ以テ己カ子女ト看做スルハ子女ニ於テモ又其伯
叔母ヲ以テ己カ親母ト看做スハ自然ノ情ナリ
他ノ條規中ニ母ノ姉妹ヲ先キニシテ父ノ姉妹ヲ後
チニスル理由ヲ説明セリ曰ク女子未亡人トナレハ
則チ夫ノ親戚亦之カ後見人トナル可シ然レモ此後
見人ヲ撰フニ方テ法律ニ於テハ父族ノ親戚ヨリモ
母族ノ親戚ヲ尚ヘリ是レ女子ハ家族ノ中ニ在リテ
専ラ同性女子ト相交ルニ由リソノ親睦ノ情ハ父族
ノ親戚ニ於ルヨリモ自ラ母族ノ親戚ニ厚キヲ以テ

ナリ又人ヲ殺シテ未タ罰金ヲ出サレハ其資財ヲ
以テ之ヲ償ハシムルノ法律ナルニ若シ資財ヲ罄シ
テ尚ホ足ラサルハ之カ親戚ニ命シテ其不足ヲ補
ハシム此時ニ方テ其辨償法ハ父母ニ始リテ兄弟ニ
及ヒ續キテ母ノ姉妹ニ到ルハ恰モ至親ニ於ルト異
ナルヲナシ母族ノ親戚ノ其苦累ヲ蒙ムル可キヤ斯
ノ如シ宜ナルカナ其利益ニ至テモ齊シク俱ニ受用
セサル可ラサルヲ

又曰ク紹續ノ權ハ父ノ姉妹ニ亞キテハ應サニ父族
ノ近親ニ属ス可シ然レモ五等親以外ノ者ハ敢テ之
ニ干預スルヲ得スト果シテ然ラハ五等親ノ女子ハ

六等親ノ男子ヲ超ヘテ其紹續ノ權ヲ得可キナリ夫
ノ「サリク」法律ノ正解トモ稱スヘキリ「ハリヤニ」フ
ラニクスノ法律中ニアル私有地ノ條規モ亦之ニ異
ナラス

若シ父ニ子アレハ「サリク」法律ニ於テハ女子ノ「サリ
ク」田ヲ紹續スル「フ」ヲ許サス必ス之ヲ男子ニ傳フヘ
キモノト決定セリ

「サリク」法律ニ於テハ敢テ全ク女子ニ「サリク」田ヲ所
有セシメサルニ非ス唯タ兄弟ノ之ニ先ツモノアル
ニ方テ然ルノミ今之ヲ証明スルハ難キニアラス即
チ其條規ニ女子ハ「サリク」田ヲ所有ス可ラスト掲載

レ而レテ之ヲ紹續スルハ男子即チ其父ノ子ニ限ル
可シト追加レ大ニ男子ノ字義ニ制限アル見テ知ル
可キナリ

第二、「サリク」法律ノ疑フヘキ條歟ハリ「プアリヤン」
「フランクス」ノ法律ヲ視テ始テ釋然タルヲ得可シ是
レ其私有地ノ條規ノ大ニ「サリク」法律ニ髣髴スルヲ
以テナリ

第三、都テ日耳曼地方ヨリ蜂起シタル蠻民ノ法律
ハ殆ト同一ノ主義ニ成リレカ故ニ彼此相須テテ互
ニ發明スルヲ得ヘキナリ譬ヘハ「サキソン」人ノ法律
ニ父母ノ遺産ハ其女ニ傳ヘス必ス之ヲ其子ニ傳フ

可レト然レモ若シ女子アリテ男子ナキハ全ク之ヲ女子ニ相續セシムルモ妨ケナキカ如キ是レナリ
 第四、嘗テ古ノ牒簿二冊ヲ得シニ其一ニ「サリク」法律ニ於テ男女相竟フ時ハ女子ヲ置キテ男子ニ紹續ノ權ヲ得セシムルヲ記セリ
 第五、他ノ一冊ニ於テハ女子ハ孫ニ先チテ相續スヘキヲ記セリ是レ女子ノ讓ル處ハ唯タ其兄弟ニ限ルヲ證ス可シ

第六、若シ「サリク」法律ニ於テ概シテ女子ニ土地紹續ノ權利ヲ與エサルモノトセハ古代ノ史記、牒簿、券符ニ歷々女子ノ土地ヲ領有スルヲ掲載スルモ一

トシテ信據ヲ置クニ足ラストスルノ外トシ豈ニ其レ然ランヤ

人皆ナ「サリク」田ヲ以テ籍土ノ制ト爲スハ大ナル悞ナリ第一、「サリク」田ハ私有ノ土地ナリ第二、籍土ハ其初メ世襲ノ所有ニアラス第三、果シテ「サリク」田ヲ籍土ノ制ナリトセハ何故ニマルキルノスハ男子ノ無キ時ニ之ヲ女子ニ紹續セシメサルノ風習ヲ論シテ神意ニ戾レルト爲セシ耶第四、「サリク」田ヲ籍土ノ制ナリトナシ其証左トシテ援用セシ處ノ古券符ハ適以テ其私有地タリレヲ明示スルニ足ルノミ第五、籍土ノ制ハ日月曼人カ佛國ヲ占領シタル後ニ創定セ

シモノニシテサリク田ハソノ未タ日耳曼ニ在リシ
キニ實踐シタルノ風習ナリ第六「サリク」法律アルニ
因テ籍土ノ制ヲ設ケ以テ女子ノ紹續ヲ制限セシニ
アラス紹續權ニ制限ヲ加ヘテ「サリク」法律ヲ改革セ
シハ全ク籍土ノ制ノ創立ニ因レリ

斯ノ如ク説キ去ルキハ人或ハ謂ハシ男子ニ非スシ
テ佛國ノ王冕ヲ戴ク可ラサルノ制度ハ原ト「サリク」
法律ニ淵源スルモノニアラサルヘシト此言實ニ然
リ諸蕃ノ法律ニ據リテ以テ其疑フ可ラサルヲ確
信ス可シ「サリク」法律及ヒブルゴンディヤン人ノ法律
ニ據レハ女子ハ其兄弟ト齊シク土地ヲ紹續スル權

利ヲ有セス又王位ニ即クヲ許サスト雖モ「サリ
グ」ト人ノ法律ハ之ニ反シ女子ヲシテ其兄弟ト俱ニ
土地ヲ紹續セシメ王位ヲ嗣承セシメタリ蓋シ此國
民ハ民法ノ規則ニ依テ以テ其政法ノ幾部モ更改セ
シモノナル可シ

佛朗機人ノ政法ノ民法ニ因リテ更改セラレタル類
例ハ固ヨリ此一事ニ止ラス「サリク」法律及ヒブルゴ
ンディヤン人ノ法律ニ據レハ兄弟都テ齊シク土地ヲ
紹續シ得可シ故ニ佛朗機ブルゴンディヤンノ王國ニ
於テ篡弒ノ變ヲ除ク外ハ皆ナ兄弟ニテ王位ヲ承襲
シタリ

第二十三回 佛朗機人ノ王位ヲ表スル裝飾

ヲ論ス

土地ヲ耕サ、ル人民ハ絶テ奢侈ノ念ヲ生スルハ無
シタレトスノ書ヲ讀ミテ日耳曼人ノ衣服裝飾專ラ
質樸ヲ尚ヒ文華ヲ祛ケ酋長ノ尊榮ヲ表シテ之カ上
下ノ分ヲ立ルモ唯タ天然ノ容姿ヲ脩飾スルニ過キ
ス佛朗機アルゴンディヤン、ウキシゴットノ諸王皆ナ其頭
髪ヲ剪ラサルヲ以テ君冠トスルノ良風俗アリシヲ
知ルヘシ

第二十四回 佛朗機王ノ婚姻ヲ論ス

農ヲ務メサル人民ノ婚姻ハ一定持久ノモノニアラ

スレテ且概子數婦ヲ娶ルハ既ニ前ニ論セルカ如
シタレトス曰ク諸蕃ノ中、一婦ヲ娶リテ満足スルモ
ノハ夫レ唯タ日耳曼人カ固ヨリ日耳曼人ノ中間々
數婦ヲ娶ルアルヲ免レスト雖モ全ク至尊ノ地位ニ
在ルニ因テ然ルノミ敢テ風俗頹敗シテ檢束ナキニ
因テ然ルニ非サルナリ

故ニ佛朗機姓ノ諸王ニ數多ノ妃嬪アリシモ唯タ其
地位ノ尊キニ因テ然ルモノ居多ニシテリノ荒淫ノ
念ニ出シテ甚タ黷ナキヲ以テ人民ハ國王ヨリ此特
准ヲ剥キ去リテ其愛情ヲ損傷スルニ忍ヒサリキ是
レ王室ニ此弊アリシト雖モ臣民一人トシテ之ニ倣

フモノ無キ所以ナリ

第二十五回 チルデリック王

タレントス曰ク日耳曼人ハ婚禮ヲ守ル極メテ嚴重
ニシテ敢テ邪淫ノ行ヲ徒ニ笑柄ニ付セルナク
ニ之ヲ惡ムヲホフ人ノ操守ヲ破リ或ハ人ニ之ヲ破ラルハ
ヲ視テ決ノ時好習慣ニ委ネテ恬トシテ顧ミサルカ
如キモノ非サルナリ故ニ絶エテ此衆多ナル人民ノ
ソノ夫婦ノ信義ヲ亂レタル類例ヲ見ル可ラス
チリデリック王カ其國ヲ放逐サレシモ全ク德行アル
國民ノ心ヲ駭セシカ爲メニシテ王ハ其國ニ捷チレ
カ氏未タ其操守ヲ破リ能ハサリシナリ

第二十六回 佛朗機王ノ成丁ヲ論ス

土地ヲ耕サ、ル未開ノ人民ハ造為シタル法律ノ成
典無キヨリ專ラ公法ヲ用ヰテ其治ヲ敷キ更ニ民法
ニ依頼スル少ナシ故ニ瞬時モ兵仗ノ其手ヲ去ル
丁無キモノナリタレントス曰ク日耳曼人ハ曾テ兵仗
ヲ執ラスエテ公私ノ事務ヲ治理セシ丁無キ其票ヲ
授シ言ヲ發スルニ方テモ亦金鼓ヲ撃テリ民皆年ノ
男子ハ之ヲ家族ノ一部ニ属セシムルモ若シ其年齡
兵ヲ執リ得ルニ到ルヤ此時ヲ以テ成丁ノ期ト為シ
直ニ人民ノ會場ニ赴カシメ之ニ手槍ヲ授ケ此時ヲ
以テ共和人民ノ一部ニ属セシメタリト

オストロゴット王ノ言ニ曰ク鷹雛ハ其爪翼纔カニ成
レハ直チニ生物ヲ捕食シ更ニ母鳥ノ哺養ヲ仰ク
無ニ然ルニ我カ部属ノ壯者ニシテ其年齢ニ達スル
モ未タ一己ノ庄田ヲ理メ一身ノ行為ヲ經營シ能ハ
サルハ豈禽鳥ニ愧サルナカラシヤ我カゴット人ハ須
ラク此成徳ノ日ヲ以テ成丁ノ期トナス可キナリト
チルデベルト第二世機王朝カ其叔父ゴントラムニ推
立セラレ成年ニ達シテ親ヲ萬機ヲ聴クニ堪フ可シ
ト公告セラレシハ其十五歳ノ時ニ在リチルハ五百七
十五年其齡五歳ニシテ踐祚ニ叔父ゴントラム之カ
攝政タルヲ十年即チ五百八十五年ニ至テ政務ヲ親
裁セ又リプアリヤンノ法律ニ據レハ人若シ男子ヲ

遺シテ死亡スルモ其子満十五歳ニ到ラサレハ敢テ
訟庭ニ出テ、原告被告ト爲ル可ラス故ニ男子八十
五歳ニ到テ始テ執兵ノ器量ト成丁ノ資格トヲ兼有
スルモノトナシ自ラ一身ノ權利ヲ辯護シ或ハ代闘
士按腕カヲ以テ訴訟ノ曲直ヲ決スヲ擇ムヲ得セ
ルル氏ニ本人ヨリ出セル處ノカ士ニ出テ、其權利ヲ辯護スルカ爲メ
ニハ知識全ク發達セサル可ラス又單身ノ勝負ヲ決
スルニ方テモ其身ヲ扞禦スルカ爲メニ軀幹強壯ナ
ラサル可ラサルヲ以テナリブルゴンデヤン人モ亦
角鬬ヲ以テ訴訟ノ曲直ヲ決スルニ十五歳ニ至ラサ
レハ之ヲ許容セサリシト

アガテヤスノ説ニ據レハ佛朗機人ノ兵仗ハ甚々輕
キヲ以テ十五歳ニ到レハ之ヲ用フルニ堪ヘタリレ
モ其後漸ク重量ヲ増シ終ニチヤルマンエ帝ノ世ニ
至テハ之ヲ裨史演義ニ見ルカ如キ巨大ノ物具ト為
リ遂ニ籍土ヲ領スル士人及ヒ兵役ニ就ク者ハ二十
一歳ニ到ラサレハ一丁ト成リ能ハサルト爲レリ
平民ハ依然トシテ十五歳
ヲ以テ成丁ノ年トナセリ

第二十七回 同上

總テ丁年ニ到ラサル日耳曼人ハ猶オ家族ノ一部ニ
シテ未タ共和人民ノ一部ニアラサルヲ以テ國會ニ
出頭スルヲ許サ、ル王者ト雖モ兵仗ヲ執リ得ル

ニアラサレハ決ソ其位ニ即クヘキ權利ヲ有セシメ
サルニ至レリ故ニブルゴン^{デキ}一ヲ征服シタルオ
リス王ノ諸子カ幼冲ニシテ未タ國會ニ親臨シ能
ハサルヲ以テ王冠ヲ戴カサリシモ全ク此理由ニ出
ルモノニシテ幼冲ノ間ハ其祖母コロチル^{デキ}ス權ニ
其國政ヲ攝理セリ然ルニ叔父コロチル^{デキ}ス及ヒチ
ルデベルト謀ヲ合セテ母子ヲ暗刺シ二人ニテ其國
ヲ分纂セシメアリシニ因テ以後此舊制ヲ廢止シ若
シ國ノ大喪ニ遭フ時ハ其王子ノ幼冲ナルニ拘ラス
直チニ之ニ大統ヲ繼カシムルヲ以テ恒例トナセリ
即チゴンドワルト公カチルペリクノ毒手ヨリ僅カ

五歳ナルチルデリク二世ヲ救ヒ出シテ王位ヲ踐マセシハ其明證ナリ

斯ノ如ク王室ニハ舊制ヲ更メサル可ラサルノ變亂アリシト雖モ人民ハ依然トシテ舊時ノ例典ヲ株守シ敢テ幼君ノ名ヲ以テ一國ノ公事ヲ辦理セス故ニ幼君在位ノ時ハ其一身ニ属セルモノト王國ノ公事ニ属セルモノト内外二途ノ治務アリ籍土ノ領主ニ於テモ亦一身ノ後見職ト領内ノ治務トノ區別ヲ生シタリ

第二十八回 日耳曼人ノ養子ヲ論ス

日耳曼人カ他人ニ養ハレテ義子ト爲ルハ乃チ成丁

ノ期ニ同シクソノ兵仗ヲ執リ得ルノ片ニ在リ故ニゴントラムカ其侄チルテベルトノ成丁ヲ公告シ認メテ義子ト爲ス片ノ言ニ令我カ王國ヲ舉ケテ之ヲ汝ニ讓與セン其信徴トシテ汝カ手ニ此利槍ヲ授ク可ト説キ訖テ會衆ニ向テ曰ク有衆視ヨ我カ義子チルトベルトハ既ニ成人セリ其命令ニ違フ勿ト又ラスト口ゴツト王テヲドリクハヘルリ王ヲ養子ト爲サント欲シ乃チ書ヲ贈テ曰ク勇士ニアラサルヨリハ我カ義子ノ名ヲ冒スニ足ラス武勇ニ因リテ養子ヲ撰ムハ我國ノ美制ナリ此制度ノ勢力ハ人ヲニテ生キテ恥辱ヲ受ケニヨリハ寧口死ニ就クノ清潔

ナルニ如カサルノ氣象ヲ發作セシムルモノナリ故
ニ今國ノ制度ニ準則シ汝ノ勇士タルニ依頼シテ茲
ニ堅楯名劔良馬ヲ贈リ汝ヲ養フテ我カ義子トナス
可シト

第二十九回 佛朗機諸王ノ性情殘忍ナルヲ

論ス

佛朗機部落ノカオル即チ佛蘭西國ヲ征畧セシハコロウ
ス一人ニ止ラス同種族ノ中ニモ亦其部属ヲ率ヒテ
國內ニ進入セシモノ數カラス然レトモ獨リコロウ
キスノ軍ノミ大勝ヲ得テ許多ノ土地ヲ略取シ之ヲ
割キテ從征ノ將士ニ分賜セシヨリ各部落ノ佛朗機

人皆ナ來リテ其麾下ニ臣属シ自餘ノ酋長ハ自ラ勢
ヒ孤ニ力寡ク終ニコロウキスニ敵シ能ハスレテ全國
其權ニ翕從セリ於是カコロウキスハ陰謀ヲ設ケテ次
第二其同類ヲ剪滅シ之ヲ以テ王位ヲ覬覦スルノ患
ヲ杜絕セシカ其弊毒子孫ノ治世ニ遺傳シ權威ニ任
セテ殘酷ヲ極メ兄弟叔侄互ニ相猜疑ノ王室ハ殆ニ
ト反謀陰計ノ淵藪ト爲レリ故ニ在位者ハ王國ヲ一
統シテソノ名利ノ心ヲ達シ殘虐ノ行ヲ逞クセント
欲セシカ法律ニ於テ遂ニ之ヲ分裂セサルヲ得サ
ル形勢ニ至レリ

第三十回 佛朗機人ノ國會ヲ論ス

土地ヲ耕サ、ル人民々自由ヲ享用スルノ著大ナル
ハ己ニ論ヒレ處ノ如シ

日耳曼人ヲ除キテ能ク此語ニ當ルモノ無カル可シ
タレトスハ日耳曼人ハ其君長ニ大權ヲ授ケシテ無
レト論シ、シーザルハ日耳曼人ハ平和ノ時ニハ一頭
ノ主宰ヲ戴ク、無ク各村ニ酋長アリテ部民ノ訟獄
ヲ裁判セリト説ケリ是レグレゴリー史カ日耳曼ニ
在ル佛朗機人ニ君王無レト言ヘル、我ヲ欺カサ
ルヲ証スルニ足レリ

タレトス曰ク君長ハ唯タ尋常ノ庶務ヲ商量スルノ
ミニレテ重大ノ機務ハ之ヲ國民全体ノ會議ニ付シ

其承認ヲ經テ再ヒ君長ニ托シテ之ヲ施設セシム此
制度ノ佛國ヲ征服シタル後猶更改セサリレハ古記
舊録ノ存スル者ニ就テ知ルヘシ

タレトス曰ク大獄ヲ斷スルモ亦國會ノ權ニ在リテ
佛國征服ノ後國會ニ於テ候伯ノ罪ヲ審糾セシハ即
チ其遺風ナリ

第三十一回

佛朗機家治國ノ初世ニ方テ僧

侶ノ權甚タ大ナリニヲ論ス

諸蕃ノ民ハ盲昧ニシテ鬼神ヲ懼ル、極メテ甚タシ
故ニ其僧侶ハ法教ヲ掌トルノ故ヲ以テ非常ノ威權
ヲ握レリタレトスニ據レハ日耳曼人ハ極メテ僧侶

ヲ尊敬ニ僧侶ヲミテ國會ノ議長タラシメ僧侶ニ限
リテ人民ヲ懲責スルト捕縛鞭撻スルノ權ヲ許容セ
リ蓋シ僧侶ニ此權アリシハ固ヨリ君長ノ命ヲ奉シ
テ然ルニアラス曲直ノ裁判官タルヲ以テ然ルニア
ラス唯戰士ノ頭ニハ常ニ鬼神ノ照臨アリト妄信セ
シニ由ルモノナリ

然ルヲ以テ佛國々初ノ王室ニ於テ屢廣大ナル土地
ヲ占領シ曲直ノ裁判官ト爲リ國會ニ出頭シ君主ノ
心魂ヲ支配セシ尊大ナル僧侶ヲ目撃スルモ固ヨリ
偶然ノ一ニアラサルナリ
萬法精理卷之十八畢

明治八年十一月廿八日版權免許

繙譯並出版人

何禮之

東京富士見町四丁目十一番地

馬喰町二丁目

島村利助

芝太神宮前三島町

山中市兵衛

日本橋通三丁目

丸家善七

發兌
書林

南傳馬町二丁目

穴山篤太郎